

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集

せん ぞく みなみ

千足南遺跡発掘調査報告書

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

2007

緑資源機構東北北海道整備局
下閉伊北建設事業所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

千足南遺跡発掘調査報告書

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、10,000ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。先人の残した文化遺産を保護し保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、快適な生活を送るための地域開発と社会資本の充実もまた県民の切実な願いであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって消滅する遺跡について、歴史資料・史料としての遺跡情報の記録保存を目的とした調査・研究を行ってまいりました。

本報告書は、農用地総合整備事業に伴って平成17年度に行われた田野畠村千足南遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。調査によって縄文時代早期～前期を主体とする遺構・遺物や古代の竪穴住居跡が発見され、本県沿岸北部においては貴重な資料を多数得ることができました。この報告書が広く活用されることで、東北地方における地方史研究の発展や、埋蔵文化財に対する県民の理解を深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご理解とご協力を賜りました緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所、田野畠村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年2月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 武田 牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡田野畠村字千足59-16に所在する千足南遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は「農用地総合整備事業」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集『平成17年度発掘調査報告書』に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。
- 4 本遺跡の岩手県遺跡白帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は以下の通りである。
　　遺跡コード番号：KG 11-1013
　　遺　　跡　略　号：SZM-05
- 5 発掘調査期間・調査面積（調査対象面積）・調査担当者は、以下のとおりである。
　　調　　査　期　間：平成17年6月1日～7月29日
　　調　　査　面　積：2,297m²
　　担　　当　者：米田 寛・林 熱
- 6 室内整理期間及び整理担当者は、以下のとおりである。
　　整　理　期　間：平成17年12月1日～平成18年3月31日
　　担　　当　者：米田 寛・林 熱
- 7 野外調査での遺構写真撮影は調査員、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付き職員が担当した。
- 8 本報告書の執筆はIを緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所、II～IV・VIを米山が担当し、編集・校正は米田が行った。
- 9 出土遺物の鑑定・分析及び業務委託は次の機関に委託した（敬称略）。
　　種子同定……吉川純子（古代の森研究会）　　火山灰同定……柴 正敏（弘前大学）
　　年代測定……株式会社 加速器分析研究所
- 10 発掘調査・整理作業・報告書作成にあたって以下の方々に御教示・御協力をいただいた。
　　安達尊伸（田野畠村教育委員会）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、
　　坂川 進（八戸市博物館）
- 11 本報告書に掲載した地図は以下の通りである。
　　国土交通省国土地理院1:25,000地形図「沼田」(NJ-54-13-1-3)
- 12 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 地形と気候	1
2 周辺の遺跡	4
3 基本土層	4
III 調査の方法	6
1 発掘調査	6
2 室内整理	7
3 掲載図版・観察表解説	7
IV 遺構・遺物	10
1 概要	10
2 遺構	10
3 遺物	32
V 分析・鑑定	46
1 千足南遺跡2号竪穴住居跡より出土した炭化種実	46
2 年代測定分析結果	48
3 千足南遺跡出土の火山灰について	50
4 分析結果の所見	51
VI まとめ	52
1 遺構	52
2 遺物	53
引用・参考文献	54
報告書抄録	74

図 版 目 次

第1図 千足南遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第18図 遺物集中部1	24
第2図 基本土層	5	第19図 遺物集中部2	25
第3図 調査区設定図及び遺構配置図	6	第20図 遺物集中部3	27
第4図 凡例	9	第21図 遺物集中部4・5	29
第5図 1号堅穴住居跡	11	第22図 遺物集中部6	30
第6図 1号堅穴住居跡カマド	12	第23図 遺物集中部7	31
第7図 2号堅穴住居跡	14	第24図 縄文土器1 (I・II a群)	34
第8図 2号堅穴住居跡カマド1・2	15	第25図 縄文土器2 (II a・II b群)	35
第9図 2号堅穴住居跡検出	16	第26図 縄文土器3 (III群)	36
第10図 2号堅穴住居跡床面での焼土、炭化物拡散状況	16	第27図 縄文土器4 (IV群)	37
第11図 2号堅穴住居跡遺物分布	16	第28図 石器1	38
第12図 2号堅穴住居跡掘り方	17	第29図 石器2	39
第13図 3号堅穴住居跡	19	第30図 石器3	40
第14図 3号堅穴住居跡掘り方	19	第31図 石器4	41
第15図 3号堅穴住居跡カマド	20	第32図 土師器	42
第16図 1~4号土坑	22	第33図 千足南遺跡2号堅穴住居跡より出土した炭化種実	47
第17図 1~3号焼土遺構	23		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	2	第11表 縄文土器観察表①	43
第2表 遺物集中部1組成表	24	第12表 縄文土器観察表②	44
第3表 遺物集中部2組成表	25	第13表 石器観察表	45
第4表 遺物集中部3組成表	26	第14表 土師器観察表	45
第5表 遺物集中部4組成表	28	第15表 千足南遺跡2号堅穴住居跡より出土した炭化種実	46
第6表 遺物集中部5組成表	28	第16表 年代測定結果	49
第7表 遺物集中部6組成表	28	第17表 千足南遺跡出土火山灰	50
第8表 遺物集中部7組成表	31	第18表 千足南遺跡火山ガラスE PMAデータ	51
第9表 縄文時代遺物組成表	32		
第10表 石器・石材組成表	33		

写 真 図 版

写真図版 1 千足南遺跡.....	56	写真図版 9 繩文土器①.....	64
写真図版 2 基本土層、調査区完掘、 1号堅穴住居跡.....	57	写真図版10 繩文土器②.....	65
写真図版 3 2号堅穴住居跡①.....	58	写真図版11 繩文土器③.....	66
写真図版 4 2号堅穴住居跡②.....	59	写真図版12 繩文土器④.....	67
写真図版 5 3号堅穴住居跡①.....	60	写真図版13 繩文土器⑤.....	68
写真図版 6 3号堅穴住居跡②、1・2号土坑.....	61	写真図版14 石器①.....	69
写真図版 7 3・4号土坑、1・2号焼土遺構.....	62	写真図版15 石器②.....	70
写真図版 8 3号焼土遺構、調査区壁完掘、 現地説明会.....	63	写真図版16 石器③.....	71
		写真図版17 石器④.....	72
		写真図版18 上齶器.....	73

I 調査に至る経緯

千足南遺跡は、農用地総合整備事業下閉伊北区域の農業用道路田野畠工区内に位置しているため、当該事業の施行に伴い発掘調査を実施することとなったものである。

農用地総合整備事業下閉伊北区域は、岩手県の北東部太平洋沿岸に位置する下閉伊郡岩泉町、田野畠村及び普代村を対象として、地域特性である夏期冷涼な気候を活用し、需要動向に即した野菜等の生産性の高い農業及び畜産農家と連携して堆肥を活用した有機農業の展開を図るために、既耕地の区画整理等、並びに附帯する川排水改良等の土地基盤整備に合わせて、農畜産物流通の迅速化を目指し農業用道路を一括的に整備し、本区域の農業の活性化に資することを目的に現在事業を進めている。

農業用道路田野畠工区の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、田野畠村教育委員会による分布調査を経て、平成16年7月7日付「16緑機審事第243号」により緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に試掘調査についての依頼を行い、岩手県教育委員会による試掘調査が平成16年8月10日に実施された。その結果、平成16年9月9日付「教生第829号」により千足南遺跡の発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と緑資源機構東北北海道整備局が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

(緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所)

II 遺跡の立地と環境

1 地形と気候

(1) 遺跡周辺の地形

リアス式海岸が發達する三陸海岸中・南部とは対照的に、宮古市よりも北の海岸線は比較的平滑で、固結した岩石からなる高い海食崖が連なっている。宮古以南のリアス式海岸が第三紀末～第四紀初頭ころの大沈降によって生じたのに対し、沿岸北部の段丘は第四紀における海食と隆起によって形成されたものである。この地域の河川は侵食力が弱く、海岸崖に小規模な沢や滝を形成して海に流入しているものが多い。標高100～300mには、最終間氷期よりも古い段階の海進によって形成された広い海成段丘面（高位段丘面）が分布している。最終間氷期に形成された中位段丘面は標高30～50mに分布しているものの幅がきわめて狭く、遺跡が多く分布する高位段丘面とくらべると完新世における人類生活の舞台となった痕跡は少ない。

遺跡の密集する海成段丘面よりも西側は、田野畠村内の大部分を占める山地、丘陵地が広がっている。千足南遺跡の所在する田野畠村北西部では、高位段丘面の背部に位置する小起伏山地に四方を囲まれ、山地を縫うように流れる小河川流域に人類の居住活動の痕跡がみられる。千足南遺跡は海岸との距離約11km、標高は約320～340mにある（写真図版1）。村内のはば中央に位置する田野畠村役場からは北西約7.5kmの距離に所在する。遺跡の西側を流れる千足沢によって形成された氾濫平野上に

位置し、遺跡内には洪水砂と考えられる堆積層が確認できる。千足沢は南流し、やがて沼袋地区で普代川と合流するが、その流れは普代村を通って太平洋に至る。

現在の土地利用は、普代川流域の沼袋地区が標高240～260m前後に位置し、集落の形成が進んでいるのに対し、千足南遺跡の所在する田代地区では標高300m台で、牧草地・畑地・山林となっている。

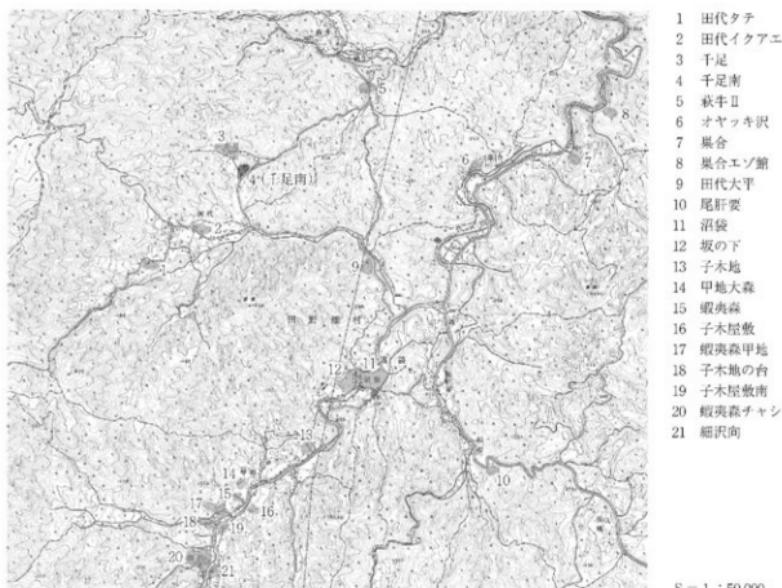
(2) 気候

シベリア大陸は、春から夏にかけて急速に温度が上昇する。これに対して、オホーツク海では融氷に日射エネルギーが費やされるため温度上昇が抑えられ、両者の気温差によってオホーツク海上にはオホーツク海高気圧が生じる。上暖下冷の安定した成層状態のなかで下層雲が発達し、日照が遮られることで放射冷却が効率的に行われ、オホーツク海に冷気が停滞する。千島列島や北海道鉄道・根室地方の夏季の天候が冷気と濃霧に特徴づけられるのと同様に、三陸海岸北部にもオホーツク海高気圧によって寒気が「ヤマセ」として時計回り方向で流入する。岩手県沿岸北部ではこのほかにも沿岸水温が低い夏季前半に日中の海風によって気温が急速に低下する「晴れヤマセ」も存在し、発生のメカニズムは異なるものの、この地方をたびたび襲ってきた冷害をもたらす複数の要因が存在している。

北緯40度に近い田野畠・普代付近では冬季は最深積雪深が100cmを越える。この地域の降雪は、冬季季節風ではなく、オホーツク海の高気圧が低気圧をブロックして湿润な東風を送り込むことによって生じており、ヤマセの変種とも考えられる。また、『平成14年度版 岩手県統計年鑑』によれば、平成13年7～10月における小本（岩泉町）の月平均気温は17.7℃、月平均日照時間は119.8時間、月平均降水量は191mmであった。平成10～12年度の平均値はそれぞれ18.9℃、132.8時間、230mmである。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物
1	KG10-2322	田代タテ	散布地	縄文・弥生	縄文土器（前期～中期）、弥生土器、石器
2	KG10-1378	田代イカアエ	散布地	縄文・近世	縄文土器、石器、鐵滓
3	KG11-1091	千足	散布地	縄文・近世	縄文土器（前期、後期）、磨製石斧
4	KG11-1013	千足南	集落跡	縄文・古代	堅穴住居跡（古代）、焼土遺構（縄文早期・前期）、縄文土器（早期～前期・晚期）、尖頭器、石鍬、石匙、磨石、土師器
5	KG11-0125	萩牛Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期・晚期）
6	KG11-0297	オヤッキ沢	散布地	縄文	打製石斧
7	KG11-1317	巣合	散布地	縄文・弥生	縄文土器（中期～晚期）、弥生土器、石皿
8	KG12-0051	巣合エゴ館	城館跡	中世	主郭、空堀
9	KG11-1089	田代大平	散布地	縄文	縄文土器（後期・晚期）
10	KG31-1229	尾肝要	散布地	縄文	縄文土器（後期・晚期）
11	KG21-0127	沼袋	集落跡	縄文・弥生、中世・近世	掘立柱居住跡（縄文・近世）、近世墓壙、捨て場（縄文後期）、縄文土器（後期・晚期）、弥生土器、中世・近世陶器（唐津、瀬戸、美濃窯、在地系など）、永楽通宝、寛永通宝、火打ち金
12	KG21-0124	坂の下	集落跡	縄文・弥生	縄文土器（中期～晚期）、弥生土器、石棒
13	KG21-0099	子木地	散布地	縄文	縄文土器、剥片石器、崩石
14	KG21-1022	甲地大森	散布地	縄文	縄文土器（後期・晚期）
15	KG21-1033	蝦夷森	散布地・産業遺跡	縄文・近世	縄文土器、陶器、磁器、鐵滓
16	KG21-1036	子木屋敷	散布地	近世	陶器、磁器、鐵滓
17	KG21-1042	蝦夷森甲地	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
18	KG20-1389	子木地の台	集落跡	縄文・古代	堅穴住居跡、縄文土器（後期・晚期）、土師器、鐵製馬具
19	KG21-1081	子木屋敷南	散布地	縄文	縄文土器
20	KG20-2329	蝦夷森チャシ	散布地・城館跡	縄文・中世	堀切、縄文土器
21	KG21-2020	細沢向	散布地	縄文	縄文土器



第1図 千足南遺跡の位置と周辺の遺跡

2 周辺の遺跡

田野畠村内ではこれまで100ヶ所以上の遺跡が確認されていた。しかし、昭和38年の分布調査以来、本格的かつ統合的な調査はほとんどおこなわれてこなかったことから、田野畠村教育委員会では平成12年度から4ヶ年計画で村内の埋蔵文化財一般調査をすすめることになった。平成12年度終了時点では131ヶ所の遺跡が確認されている。村内全域でみると遺跡の多くは南西部の高位段丘面上で確認されており、北部や西部は希薄である。このような状況は本来的な遺構の分布というより、これまでの分布調査の有無や土地利用の結果による部分が大きいと考えられる。なお、千足南遺跡は平成16年度に行われた岩手県教育委員会による試掘調査で発見された新規の遺跡で、周知の千足遺跡の南側に隣接することから千足南の登録名となった。

遺跡のなかでは縄文時代の遺跡が最も多く、時期が特定できるものでは早期11ヶ所、前期20ヶ所、中期23ヶ所、後期38ヶ所、晚期34ヶ所と後・晚期に増加傾向を示し、地域も海岸段丘上からさまざまな地形へ分布が拡大する傾向がみられる。主な遺跡を概観すると、村の南西部の浜岩泉地区に遮光器土偶のほぼ完形品が出土した浜岩泉II遺跡（田野畠村1985）、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1996年に調査し、縄文時代中期の集落であったことが確認された浜岩泉I遺跡などがある。また、その隣接地の島越地区には館石野I遺跡がある。早稲田大学文学部考古学研究室によって1987年から1993年にかけて8次にわたる調査が行われた縄文時代中期～後期にかけての遺跡で、列石を伴う大規模な遺構が確認されている。なお、館石野I遺跡は岩手県指定史跡となっており、現在も田野畠村教育委員会が継続調査を行っており、平成16年度の調査では遺跡の範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲が東側、すなわち太平洋側への延びることが確認された。村央部の田野畠地区では平成16年4月から7月まで田野畠村役場の北側に隣接する平波沢遺跡の発掘調査が行われ、近世墓、縄文時代後・晚期の堅穴住居跡が多数確認された。また、下層からは縄文時代前期の土器が発見されている。島越地区に位置する切牛II遺跡では縄文時代後期初頭の堅穴住居跡3棟のほか、縄文時代早期・前期・後期の土器、土師器の出土報告がある。また同じく島越地区の真木沢I遺跡では縄文時代早期・前期の堅穴のほか、古代の堅穴住居跡も確認されている。

千足南遺跡のある田野畠村北西部は旧沼袋村内に位置する（第1図）。遺跡は普代川流域を中心に点在しているが、旧沼袋村は近世～近代に鉄山経営で栄えた場所として知られ、製鉄関連遺跡の可能性を示す鉄滓が蝦夷森遺跡や子木屋敷遺跡で採取されている。北西部での発掘調査は子木地の台遺跡（大澤1994）と沼袋遺跡（岩手埋文2005）の2例あるが、子木地の台遺跡では古代の堅穴住居跡や土師器甕・鉄製馬具が見つかっている。沼袋遺跡からは縄文時代後期の掘立柱建物跡・捨て場・埋設土器や、近世の掘立柱建物跡・墓壇・墓碑などが見つかっている。なお、沼袋遺跡では16世紀後半の唐津産陶器、永楽通宝が掘立柱建物跡から出土しており、村内では不明瞭な中世の可能性を示す資料として注目される。その他、千足南に近在する縄文遺跡としては沼袋遺跡対岸に位置する坂の下遺跡・田代タテ遺跡がある。坂の下遺跡では後期後葉の焰付土器や優美な石棒が採取され、田代タテ遺跡では完形に近い晩期の土器が採集されている。

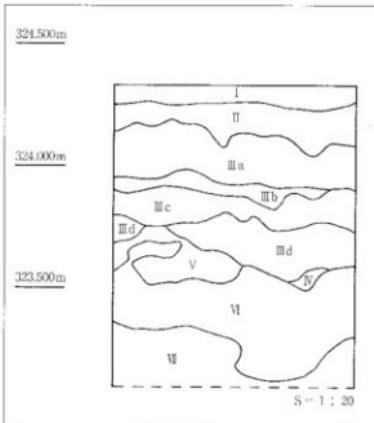
今回の千足南遺跡発掘調査は北西部で3件目となり、田代地区では初めてである。したがって、周辺遺跡との時期差や性格の比較資料として、すなわち村内北西部の一様相を知る手がかりになるものとして期待された。

3 基本土層

基本土層は調査区ほぼ中央のⅣE 1 e グリッド調査区壁で観察・記載した(第2図)。工事用盛土が少なからず残っていたため、これをI層とし、盛土以前の旧表土をII層とした。II層下に微量ではあるが灰白色粒子が見られた。火山灰の可能性があったため柴正敏氏(弘前大学)に分析を依頼し(第V章参照)たが、火山ガラスの形態や褐色ガラスを含まないことから、基盤花崗岩の風化物の可能性が高いとの報告を得た。III層は層厚の厚いところではIII a ~ III d層に分離している。古代の検出面としたIII層上部では堅穴住居跡を確認している。また、縄文時代晩期の土器はIII層下部をピークとしてII層~III層下部で出土している。IV層は洪沢砂層で、V層(十和田中振火山灰)の残存する場所付近に散在しており、V層堆積後に千足汎の氾濫がおこったと推察できる。V層は黄褐色火山灰層である。近隣の沼袋遺跡でも確認され、十和田中振火山灰(To-cu)と同定された。本遺跡での層厚は沼袋遺跡よりやや薄く5~15cm程度でモザイク状に散在し、向的な広がりのある範囲はわずかである。村内での十和田中振火山灰の確認例は沼袋遺跡のほか和野1遺跡、和野ソマナイ遺跡がある。VI層は縄文早期~前期の遺物包含層で平坦面では層厚が薄く、緩斜面ではやや厚い。焼土遺構を3基検出している。VII層は基盤花崗岩層の風化による形成層で、いわゆるマサ土である。VII層の堆積を確認するべくV D 2 aグリッドにトレッチを設定して掘り下げたが、1m近く掘削しても基盤花崗岩層に達しなかったのでVII層の層厚を確認していない。VII層は当該地域で一般的な花崗岩風化土壌による堆積層であり、周辺の崖などでは5m以上堆積が認められる。

基本土層

- I 層 10YR5/3 にぶい黄褐色土層(盛土) 層厚20~30cm 粘性なし しまりなし
- II 層 10YR2/3 黒褐色土層(表土) 層厚20~40cm 粘性なし しまりなし
- III 層 10YR3/2 黒褐色土層(上部:古代検出面、下部:縄文晩期土器出土) 層厚20~40cm 粘性なし しまりやや疎 III層は砂粒の多寡によってa~dに細分したが、堆積土に極端な差はない
- IV 層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂層(洪沢砂) 層厚5~10cm 粘性なし しまりやや密 ブロック状に見られる。
- V 層 10YR5/6 黄褐色火山灰層(十和田中振火山灰) 層厚10~15cm しまりなし 粘性なし しまり密 V層の上部と下部は灰白色
- VI 層 10YR4/4 褐色土層(縄文時代早期~前期前半遺物包含層) 層厚20~50cm 粘性なし しまり密
- VII 層 10YR3/4~10YR4/2 にぶい黄褐色~灰褐色土層(本遺跡の地山) 層厚不明 粘性なし しまり密
基盤の花崗岩帶の風化層(いわゆるマサ土)



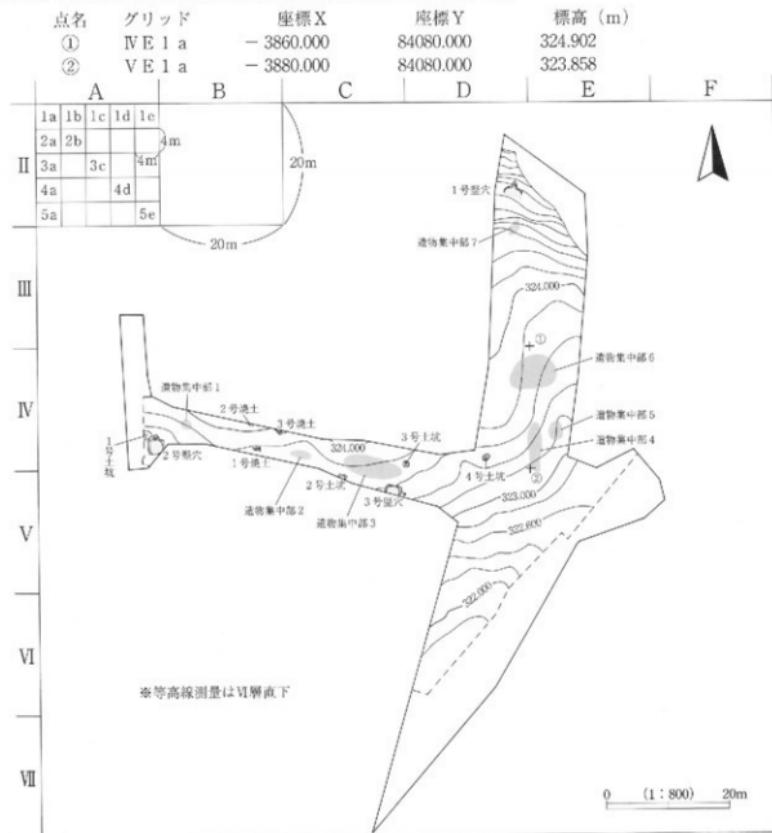
第2図 基本土層(ⅣE 1 e グリッド)

III 調査の方法

1 発掘調査

(1) グリッドの設定

発掘区全体を4mグリッドによって区分し(第3図)、グリッドの区分および方位は、平面直角国家座標世界測地系による座標を採用した。千足南遺跡のグリッド設定は緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北事業所が実施した農用地整備事業に係る「農用道測量設計業務」の成果を援用し、X・Y座標値と標高を割り出した。これを光波測量機器によって調査員がグリッド計算、および基準点の設置を行った。調査で主な基準とした座標値を以下2ヶ所提示する。



第3図 調査区設定図及び遺構配置図

(2) 調査経過

調査は農用地総合整備事業に伴うものである。平成17年6月1日に調査機材を搬入し、下草の除去および切り株周辺の清掃を行った。試掘トレッセは4ヵ所設定し、地層を確認の上、写真撮影を行った。

調査区西端と南側の舗装道路面は調査を行わなかった。西端は1号竪穴住居跡に隣接し、水道管理設工事によって削平されていた。舗装道路部分の断面観察で、地山（V層）から80cm以上の深さまで削平の及ぶことを確認した。南側の舗装道路面は沢の流れていた場所に盛土していることが、等高線の検討から明らかであった。また、隣接する調査区内では遺物が数点出土したにとどまり、遺構は確認できなかつたため、遺構・遺物の存在はきわめて低いと考えられた。この未調査範囲は、岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認で、調査の必要性のないことを判断された。

調査区は工事用の仮覆きされた盛土（I層）と表土（II層）を重機によって掘削し、III層を古代の遺構検出面とした。古代検出面では竪穴住居跡3棟、土坑2基を検出した。III層より下位の調査は手作業で行い、V層（To-cu）下位のVI層を主体として縄文時代早期～前期の遺構・遺物を発見した。

野外調査はVI層の完掘をもって終了し、平成17年7月29日に現場撤収した。

(3) 遺構調査と遺物の取り上げ

遺構は検出後に平面形と他の遺構との関係を検討してから埋土掘削し、平面・断面・完掘状況の写真撮影・記録を行った。写真撮影には35mm判モノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルム、6×7cm判モノクロ・カラーネガフィルムを使用した。

遺物は調査区等高線作成作業と併行して光波測量機により各遺物のX・Y・Z座標値を採取した。

2 室内整理

平成17年11月1日より室内整理作業を開始した。遺物は洗浄・注記・接合・選別・登録後に計測・拓本採取を行った。縄文土器はI～IV群の時期ごとに類別した。石器群については二次加工のあるトゥールを主体に実測図を掲載している。遺物は縄文土器・石器・土師器など種別ごとに掲載番号を付した。

整理作業は図版・写真図版の作成を行い、図面・写真ファイル・遺物など各資料を収納し平成18年3月31日に終了した。回収した遺物・礫は小コンテナ（30×40×10cm）5箱、中コンテナ（30×40×20cm）3箱に分けられる。

3 掲載図版・観察表解説

(1) 遺構

縮尺は概ね1/40を主体としているが、遺構サイズに合わせて適時変更している。カマドと焼土遺構は1/20を採用した。スケールは各図版に示してあり、平面図と断面図は同スケールである。なお、遺構図版中にみられる遺物図は縮尺を統一していない。詳細は遺物図版・遺物観察表等を参照されたい。

(2) 遺物

遺物図版は縄文土器、石器、土師器の順に掲載し、整理作業の都合上、通し番号を付けず、下記の遺物掲載番号を付した。

縄文土器 №1~69 石 器 №101~132 土師器 №201~209

a) 縄文土器の分類

- | | | |
|--------|-----------|---|
| I 群 | 縄文早期前葉の土器 | 押型文によって文様を描出するもの（日計式相当）。 |
| II a 群 | 縄文早期後葉の土器 | 土器の内外面に縄文を施すもの。織維を含まないものと織維を微量ながら含むものがある（赤御堂式相当）。 |
| II b 群 | 縄文早期末葉の土器 | 土器の内外面に縄文を施し、織維を多く含むもの。II a 群に比して器厚が厚い（早稻田5類相当）。 |
| III 群 | 縄文前期前半の土器 | 織維を多く含む尖底土器（早稻田6類、大木1式相当）。
口縁部に結節回転文が施文される。 |
| IV 群 | 縄文晚期の土器 | 晩期の上器を一括する。 |

b) 石器の分類

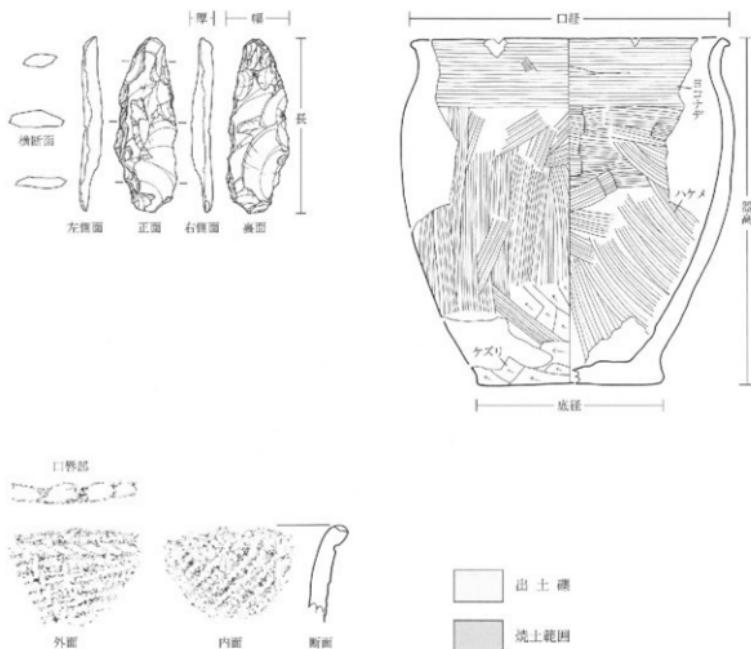
- | | |
|-------|--|
| 尖頭器 | 完形長（破損品は推定完形長）が5cm以上の尖頭状石器。 |
| 石 錐 | 完形長（破損品は推定完形長）が5cm未満の尖頭状石器で鍼として機能したと考えられるもの。 |
| 石 錐 | 器体端部に錐部を有するもの。 |
| 石 匙 | 摘み部を持つスクレイパー。 |
| 搔 器 | 素材端部あるいは側縁部に連続的な調整によって刃部を作出したもののうち直角に近い刃部角を有するもの。大半は素材端部に刃部をもつ。 |
| 削 器 | 素材端部あるいは側縁部に連続的な調整によって刃部を作出したもののうち鋭角な刃部角を有するもの。 |
| 楔形石器 | 両極剥離痕のある石器のうち剥離面がネガ面で構成されているもの。石錐製作に関わる素材供給を行った石核の機能を有すると考えられる。ポジ面を含むものはいわゆる両極剥片と捉え、楔形石器の範疇には入れない。 |
| 剥 片 | 長さと幅のどちらかが1.5cm以上の二次加工の見られない剥片石器。 |
| 碎 片 | 長さと幅のどちらも1.5cm未満の二次加工の見られない剥片石器。 |
| 石 核 | 最終剥離面がネガ面で剥片製作を意図した石器。 |
| 磨製石斧 | 磨面を有する斧形石器。 |
| 特殊磨石 | 磨面を有する横断面三角形の石器。 |
| 磨 石 A | 磨面+凹み痕+敲打痕を有する石器。 |
| 磨 石 B | 磨面+敲打痕を有する石器。 |
| 磨 石 C | 磨面+凹み痕を有する石器。 |
| 磨 石 D | 磨面を有する石器。 |

c) 石材略号

頁岩：Sh、黒色頁岩：BSh、メノウ：Ag、安山岩：An、凝灰岩：Tuff、閃綠岩：Dio、砂岩：S.S、疊岩：Cong、チャート：Ch、ホルンフェルス：Ho

d) その他観察表記載事項について

- ・織文土器と土師器は完形近くまで復元された資料がない。なお、実測図上で復元した個体については口径、器高、容量を推定値として備考欄に記載した。
- ・石鎌と尖頭器は先端角をクリノメーターで計測している。
- ・石器石材は母岩分類を行った。略号名に母岩Noを付して記載している。



第4図 凡例

IV 遺構・遺物

1 概 要

調査遺構は、竪穴住居跡3棟、土坑4基、焼土遺構3基である。所属時期は縄文時代早期～前期と奈良・平安時代に大別される。

縄文時代については、VI層検出時に土坑2基と焼土遺構3基を確認した。焼土遺構は3基とも赤化が進行していない。また、土器・石器が密集して出土した範囲を遺物集中部とした。これは2mの範囲内に5点以上の遺物がある場合に設定した操作概念上の遺構であり、掘り込みをもつ通常認識されている遺構概念とは異なる。これらは人類の活動による廃棄・遺棄行為か、あるいは自然の営力による堆積・集散で形成されたと見られる。7ヶ所確認した。遺物集中部は比較的平坦な場所や埋没沢と見られる窪地状の範囲に形成されている。

古代では奈良・平安期の竪穴住居跡3棟と土坑1基を検出した。微地形で見ると1号竪穴住居跡は標高325.600m付近、2・3号竪穴住居跡は標高323.600m付近の緩斜面上に位置している。3棟とも1辺3m未溝、床面積9m²未溝の小規模な住居跡である。

遺物は小コンテナ(30×40×10cm)5箱、礫は中コンテナ(30×40×20cm)3箱分出土した。内訳は縄文土器・土師器が小コンテナ4箱(344点)、石器が小コンテナ1箱(77点)、礫が中コンテナ3箱分(89点)である。その他、竪穴住居跡から炭化種実、骨片、水晶製碎片が出土している。2・3号竪穴住居跡出土炭化物は放射性炭素年代測定を実施し(V章2節参照)、2号竪穴住居跡のカマド内土壤から検出した炭化種実については種実同定を行っている(V章1節参照)。

縄文土器は早期後半～前期前半・晩期の資料で構成される。早期後半～前期前半の土器はVI層にビーグを持つ。調査区東側ではIIa群土器(早期後半)の出土数が多く、西側ではIII群土器(前期前半)がまとまっている。IV群土器(晩期)は表土直下またはIII層内から出土しており、粗製土器が主体である。

石器は大半がVI層で出土し、早期～前期に位置づけられる。尖頭器4点、石鏃5点、石匙2点、搔器2点、削器2点、楔形石器1点、石核2点、剥片38点、碎片9点、特殊磨石5点、磨石7点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、礫石器には砂岩、安山岩、閃緑岩が利用されている。遺物集中部3は石器製作跡で、黒色頁岩1を母岩とする剥片、碎片が出土している。

土師器は竪穴住居跡から出土し、2号竪穴住居跡では甕5個体、3号竪穴住居跡では甕4個体が出土している。

2 遺 構

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

遺構(第5・6図、写真図版2)

[位置・検出状況]緩斜面上の調査区北側のII D区に位置する。調査区より北側は山地が連なり、部分的に花崗岩風下層が露出し、雨天時には調査区内に少からず流れ込んできた。検出はII層(旧表土)を重機で掘削後にIII層上面で行っており、最初に北側のカマド煙道部範囲、それに続いて方形プラン

の住居跡範囲を確認した。検出段階ですでにカマド燃焼部の焼土が露出・散在していた。遺存状態が悪く、住居壁は南側を確認できなかった。住居にはセクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ0~3cm程度で床面に達した。住居範囲はII層からのカクランが著しい。

[埋土]10YR2/2黒褐色土の1層のみで堆積環境を理解できるほど残存していなかった。

[平面形式・内部施設]1辺約3mの正方形プランと思われ、北壁にカマドを持つ。柱穴は検出できなかった。

[カマド]北壁中央に1基設置されている。カマド構築材はほとんど消失しており、西側袖部がわずかに残存していた。構成材に白色粘土は含まれず、褐色~黒褐色土で占められる。煙道部の構築方法は上部の削平により不明である。煙道部は緩やかに傾斜しながら煙出し部へと続く。煙出し部の底部埋土は暗褐色土で、微量の焼土を包含する。燃焼部は煙道部ラインから若干西側に円形の焼土範囲を確認している。第2層には炭化物が多く見られた。

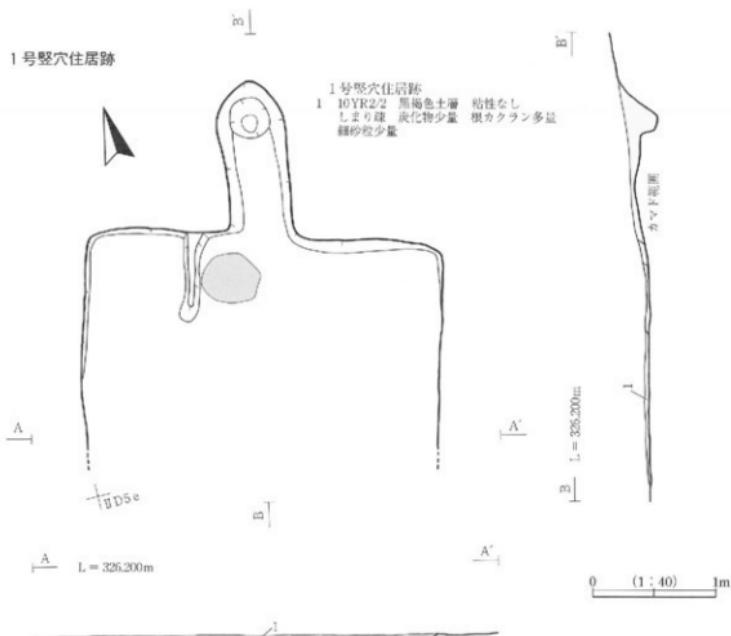
[重複関係]なし。

[掘り方]表土からのカクランにより削平された部分が多く不明確である。

[計測値]住居規模2.92×(1.8)m、床面積:5.26m²以上、床面標高:325.580m、カマド方位:N-13度-E、カマド煙道部長:75cm、カマド煙出し部径:45×50cm

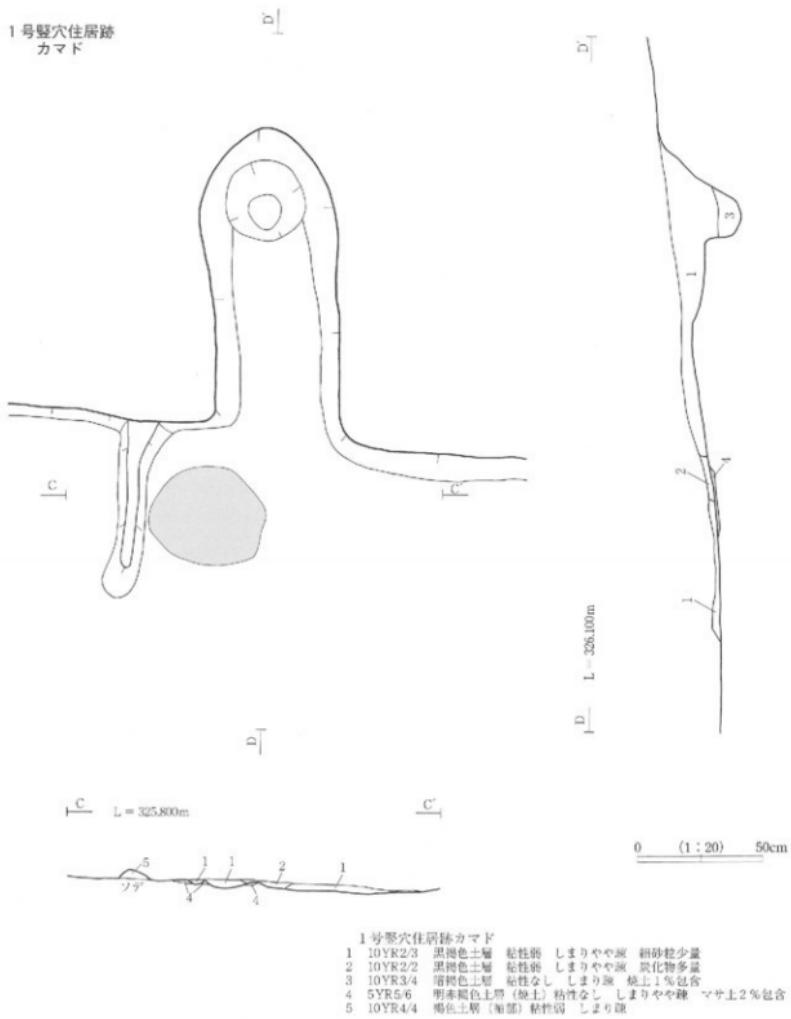
遺物 出土していない。

時期 奈良~平安時代と考えられる。



第5図 1号竖穴住居跡

1号竪穴住居跡
カマド



第6図 1号竪穴住居跡カマド

2号竪穴住居跡

遺構（第7～12図、写真図版3・4）

[位置・検出状況] 緩斜面上の調査区西側のIVA区に位置する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、黒色土の方形プランを確認した。検出段階で中央部の焼土範囲（焼上1）、カマド1の煙道部が確認でき、北側にはカマド構築材と考えられる白色粒子が散在していた（第9図）。また、北東部でわずかに見られた灰白色粒は火山灰の可能性があるもの（試料No.1）と考え、火山灰同定分析を行った（第V章3節参照）が、黒雲母の粘土化が観察され、古代の火山灰（To-a、B-Tm等）の可能性が低いとの結果を得た。これら灰白色粒についてもカマド構築材の一部と考えられる。検査棒による埋土の深さの検討では20～25cmの堆積が認められ、良好な遺存状態であることが推察された。南東部はわずかに調査区外へ続いた未検出である。方形プラン範囲はセクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ20cm程度で床面に達した。

[埋土] 10YR1.7/1 黒色土（第2層）と10YR2/2 黒褐色土（第3層）に二分される。遺物はほとんど3層内から出土している。第2層は北側がやや厚いことから、緩い傾斜に沿うように北側からの自然埋没によって形成されたと考えられる。

[平面形式・内部施設] 1辺約2.5mの方形プランで北壁にカマドを2基持つ。中央部に焼土範囲（焼土2）、南東部に柱穴を確認した。

[焼上1] 検出時に中央部から不整形の焼土範囲を確認した（第9図）。ブロック状に散在しており、原位置を保っていない可能性がある。

[焼上2] 床面中央に橋円形の範囲を確認した。範囲内とその周辺には小礫が散在しており、匪炉裏としての機能があったと考えられる。焼土の厚さは12cm程度であった。

[カマド1] 北壁中央に設置されている。カマド構築材はほとんど消失しており、袖部がわずかに残存する（第8図）。芯材に利用されたと考えられる礫が住居内に散在していることから焼絶後に崩落したものと考えられる。埋土は炭化物（第1・10層など）が多い。焼土範囲は明確であった。煙道部は燃焼部からほぼ水平に続き、煙出し部に至る。上部の埋土が削平されているため煙道部の構築方法は不明である。

[カマド2] 北壁や西側に構築されている。削抜式で煙出し部は1号土坑に削平されている。煙道部は燃焼部から住居壁まで緩やかに上り、壁付近から煙出し部に向かって緩やかに下る（第8図）。埋土の残存は悪い。検出時に確認された北西部のカマド構築材は、カマドの配置からカマド2帰属の可能性が高い。

[柱穴1] 柱痕跡をもち、底面と側面に礫が充填されている。

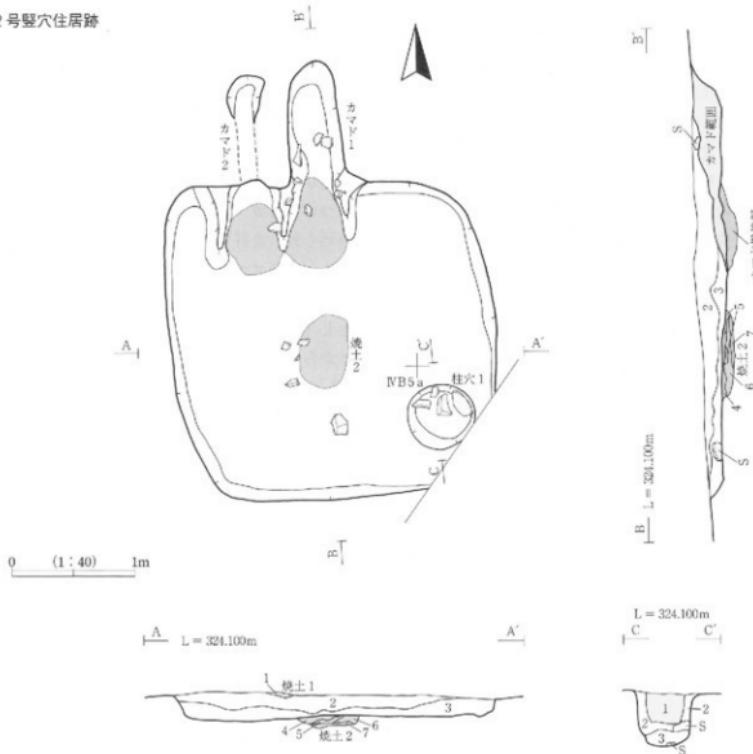
[炭化物・焼土範囲] カマド燃焼部から南方向に炭化物が拡散しており、住居廃棄後にカマド崩落を要因とする炭化物の拡散と考えられる。カマド燃焼部と焼土2のある中央部付近に炭化物量が多く、東西壁付近には炭化物が少量であった（第10図）。遺構内の炭化物出土量を考えると、住居廃棄後の火所からの炭化物拡散の可能性ばかりではなく、住居焼失による形成も考えられる。

[遺物分布] 人工物は土器器窓の破片のみである（第11図）。住居内で礫がまとまって出土したが、礫石器は見られない。カマド1内と住居内の北東部から南西方向に遺物が散乱したようである。大型礫周辺から出土する傾向にある。

[掘り方] 硬質面範囲は住居中央に広がり、硬質面を掘削すると多数の突起状の掘り方が確認できた。掘り込みは壁近くでは浅い傾向にあるが、中央部や南側はやや深い（第12図）。

[重複関係] カマド2の煙出し部が北西の1号土坑に切られている。

2号竪穴住居跡



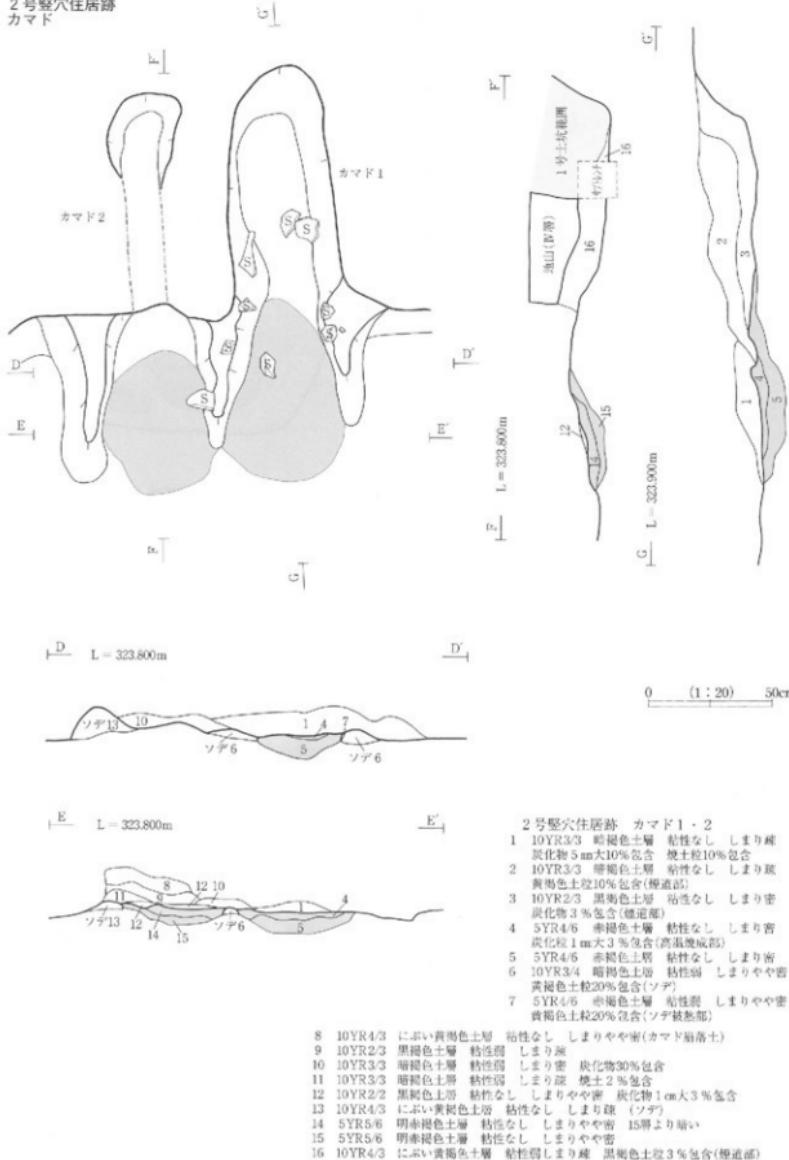
2号竪穴住居跡
1 5YR5/6 明赤褐色土層 粘性なし しまり無

2号竪穴住居跡
2 10YR1.7/1 黒褐色土層 粘性なし しまり無
3 10YR2/2 黑褐色土層 粘性なし しまりやや確
炭化物 3%包含

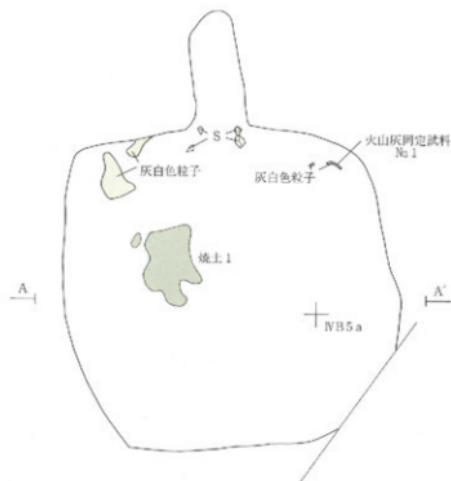
2号竪穴住居跡燒土 2
4 10YR2/3 黑褐色土層 粘性なし しまり弱
炭化物 1cm 2%包含
5 5YR4/6 黑褐色土層 粘性なし しまり弱
炭化物 1mm 1%包含(高溫燒成部)
6 10YR3/4 黑褐色土層 粘性なし しまりやや密
炭化物 3mm 2%包含(高~低溫燒成部)
7 5YR4/6 黑褐色土層 粘性なし しまり密
炭化物 3mm 2%包含(高溫燒成部)

2号竪穴住居跡柱穴 1
1 10YR2/2 黑褐色土層(柱跡)
粘性弱 しまり弱 炭化物 3%包含
2 10YR2/3 黑褐色土層 粘性弱
しまり弱 小礫包含
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性なし しまり無

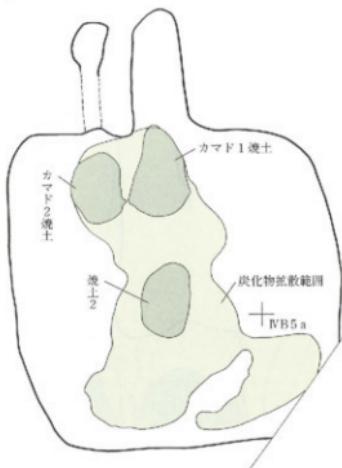
第7図 2号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡
カマド

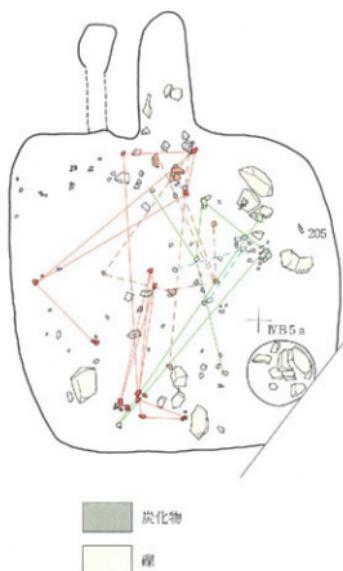
第8図 2号竪穴住居跡 カマド 1・2



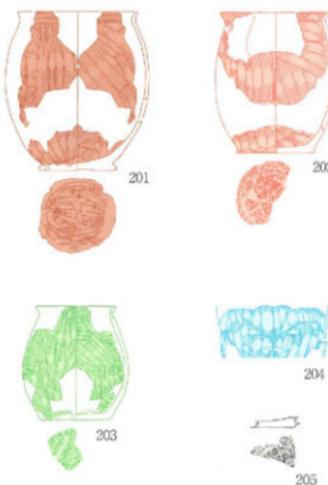
第9図 2号竪穴住居跡検出

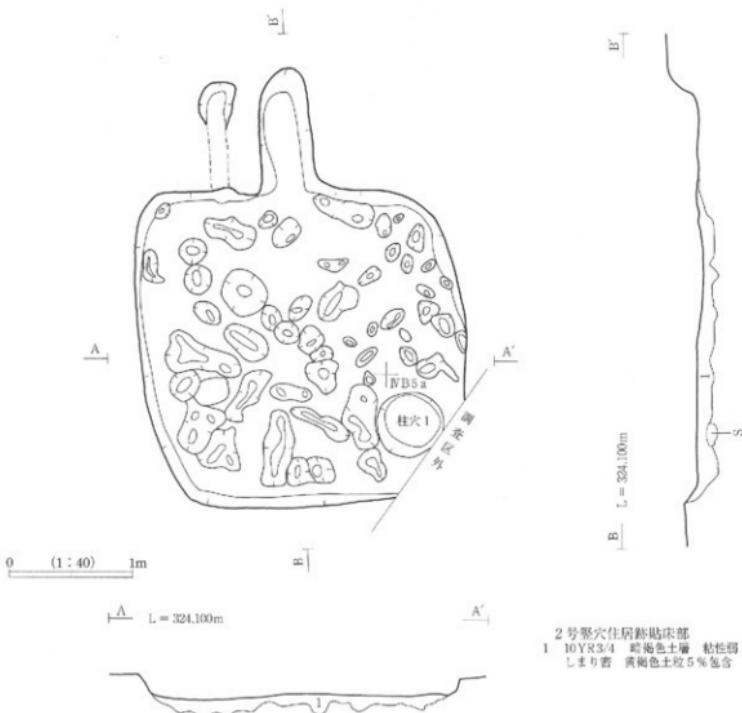


第10図 2号竪穴住居跡
床面での焼土、炭化物拡散状況



第11図 2号竪穴住居跡遺物分布





第12図 2号竪穴住居跡掘り方

[計測値]住居規模：2.68×2.58m、床面積：6.5m²、床面標高：323.480m、残存壁高：25cm

カマド 1・2 方位：N-2 度-W、カマド 1 煙道部長：75cm、カマド 2 煙道部長：90cm

柱穴 1 規模：54×53cm、柱穴 1 深さ 45cm、柱穴 1 底面標高 323.040m、柱穴 1 柱痕跡幅 30cm

焼土 1 規模：62×40cm、焼土 1 厚さ：5cm、焼土 2 規模：60×42cm、焼土 2 厚さ 12cm

遺物（第32図、写真図版18）

〔土師器〕口縁部ナデ調整の小形甌である。底部に木葉痕、底部をヘラナデ調整している。203は球胸甌の系譜であろう。補修孔が 2ヶ所穿たれている。

時期 奈良～平安時代と考えられる。なお、カマド内出土炭化物の放射性炭素年代測定値 OxCal V3.10
暦年更正プログラムでは 8世紀後半～10世紀の年代が得られている（V章2節参照）。

3号竪穴住居跡

遺構（第13～15図、写真図版5・6）

【位置・検出状況】緩斜面上の調査区ほぼ中央のVC区に位置する。検出はII層（旧表土）を重機で掘

削後にⅢ層上部で行っており、黒褐色～暗褐色の方形プランを確認した。検出段階でカマド煙出し部が確認できた。検査棒による埋土の深さの検討では約40cmの堆積が認められ、良好な遺存状態であることが推察された。遺構の南部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ40cm程度で床面に達した。

[埋土] 黄褐色土粒を含む堆積層が多い。埋土は6層に分離した。第4層の黄褐色土層はカマド崩落土を含むと考えられる。東西セクションを調査区壁第1層より上位にⅢ層の堆積が確認できたことから、古代の生活面はⅢ層上部にあると考えられる。遺物は床面上位の第3層内から出土している。埋土はレンズ状堆積を呈しており、自然埋没と考えられる。

[平面形式・内部施設] 方形プランと考えられ東壁にカマドを1基持つ。柱穴は確認できなかった。

[カマド] 東壁北側に設置されている。刳抜式である(第15図)。カマド構築材に於いては、黄褐色土、礫を使用している。崩落した構築材は住居中央に散乱し(住居埋土第4層)、袖部は芯材となる礫の残存が良好で、南側の袖部には縄文時代の特殊磨石(124)の転用も見られる。煙出し部では土師器片が出土している。燃焼部の焼上範囲は明確で、範囲内の炭化物についてでは放射性炭素年代測定を行っている(V章2節:試料No3)。煙道部は燃焼部からはほぼ水平に煙出し部まで続く。

[炭化物・遺物分布] カマド燃焼部周辺と住居中央付近に遺物が散乱している。遺物は床面を中心に土師器甕の破片、炭化物、骨片、水晶製碎片が出上しているが、量は少ない。

[掘り方] 硬質面範囲は住居中央に広がり、硬質面を掘削すると多数の突起状の掘り方が確認できた。掘り込みは壁近くでは浅い傾向にあるが、南側はやや深い(第14図)。

[重複関係] なし。

[計測値] 住居規模: 2.64×(1.32)m、床面積: 2.7m²以上、床面標高: 323.200m、残存壁高: 44cm、カマド方位: E-11度-S、カマド煙道部長: 62cm、カマド煙出し部径38×42cm

遺物(第32図、写真図版18)

[土師器] 2071は口縁部ナデ調整の小形甕である。胴上部に最大径をもつ。底部残存個体は外面にヘラケズリ調整が見られる。

時期 平安時代と考えられる。なお、カマド内出土炭化物の放射性炭素年代測定値OxCal V3.10曆年更正プログラムでは8世紀後半～10世紀の年代が得られている(V章2節参照)。

(2) 土坑

1号土坑

遺構(第16図、写真図版6)

[位置・検出状況] IV Aグリッドに位置し2号竪穴住居跡に隣接する。検出はⅡ層(旧表土)を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、黒褐色土の半円状プランを確認した。遺構の西部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ20cm程度で床面に達した。

[埋土] 黑褐色土で構成される。第1層は2号竪穴住居跡の第1層と対応すると考えられる。黒褐色土粒を微量包含する。

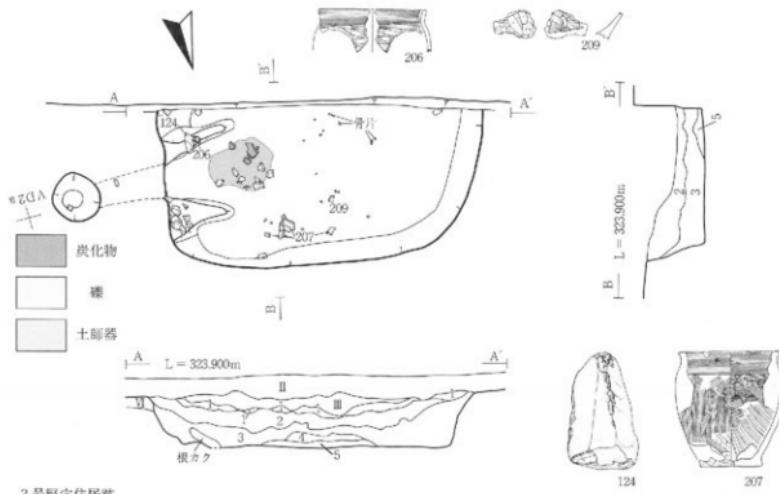
[形状] 確認された平面形態から不整梢円形を呈すると思われる。

[重複関係] 2号竪穴住居跡のカマド2煙出し部を切る。

[計測値] 規模: 140×160cm以上、検出面からの深さ: 20cm、底面標高: 323.500m

遺物 なし。

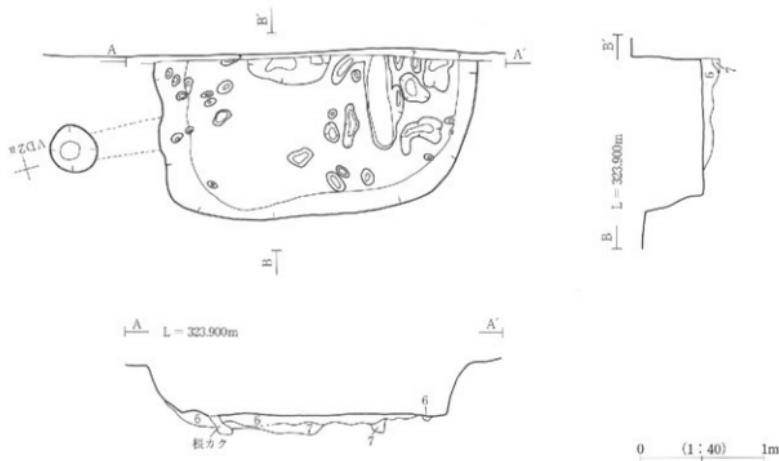
時期 検出面と埋土の状況から2号竪穴住居跡とは同時期の奈良～平安時代と考えられる。



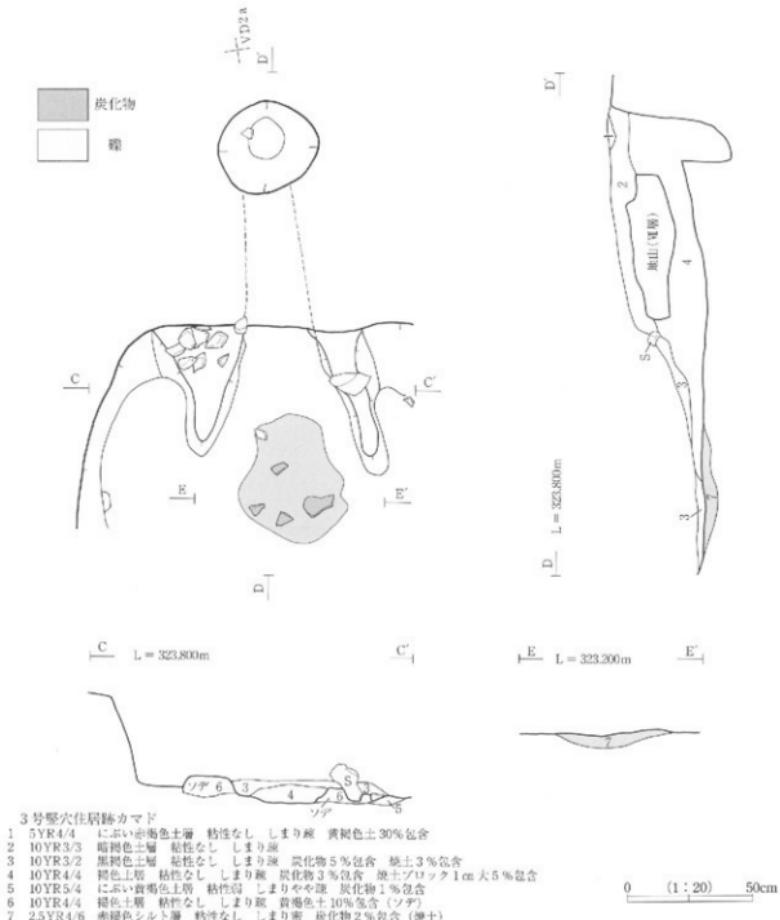
- 3号竪穴住居跡
- 1 10YR3/3 暗褐色土層 粘性なし しまりやや硬 黄褐色土粒3%包含
 - 2 10YR2/2 黒褐色土層 粘性なし しまり強 炭化物3%包含
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒10%包含 炭化物2%包含
 - 4 10YR5/6 黄褐色土層 粘性なし しまり強 カマド崩落土を含む難か?
 - 5 10YR3/3 暗褐色土層 粘性なし しまり強 炭化物10%包含

第13図 3号竪穴住居跡

- 3号竪穴住居跡點床部
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色土層 粘性なし しまり弱
 - 7 10YR5/3 にぶい黄褐色土層 粘性弱 しまり難



第14図 3号竪穴住居跡掘り方



第15図 3号竪穴住居跡カマド

2号土坑

遺構（第16図、写真図版6）

[位置・検出状況] VCグリッドに位置する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、暗褐色土の方形プランを確認した。遺構の一部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ30cm程度で床面に達した。

[埋土] 暗褐色土1層のみである。黄褐色土粒を微量包含する。

[形状] 確認された平面形態から方形を呈すると思われる。底面は礫が露出し、根カクランの可能性も

否定できない。

[重複関係]なし。

[計測値]規模：123×76cm、検出面からの深さ：34cm、底面標高：323.240m

遺物 なし。

時期 不明。

3号土坑

遺構（第16図、写真図版7）

[位置・検出状況]IV C グリッドに位置する。V層掘削のVI層上面でにぶい黄褐色土の円形プランを検出した。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ30cm程度で床面に達した。

[埋土]にぶい黄褐色土を主体とする。

[形状]平面形は円形、断面は碗形を呈する。

[重複関係]なし。

[計測値]規模：98×94cm、検出面からの深さ：28cm、底面標高：323.450m

遺物 なし。

時期 検出面から縄文時代と考えられる。

4号土坑

遺構（第16図、写真図版7）

[位置・検出状況]IV C グリッドに位置する。IV層掘削のV層上面で褐色～黒褐色土の円形プランを検出した。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ45cm程度で床面に達した。

[埋土]褐色～黒褐色土、黄褐色土、砂層で構成され、6層に分離した。第6層は底部に堆積する砂層で、IV層の流入の可能性がある。

[形状]平面形は円形、断面形は碗形を呈する。

[重複関係]なし。

[計測値]規模：134×118cm、検出面からの深さ：46cm、底面標高：322.980m

遺物 なし。

時期 検出面から縄文時代と考えられる。

（3）焼土遺構

1号焼土遺構

遺構（第17図、写真図版7）

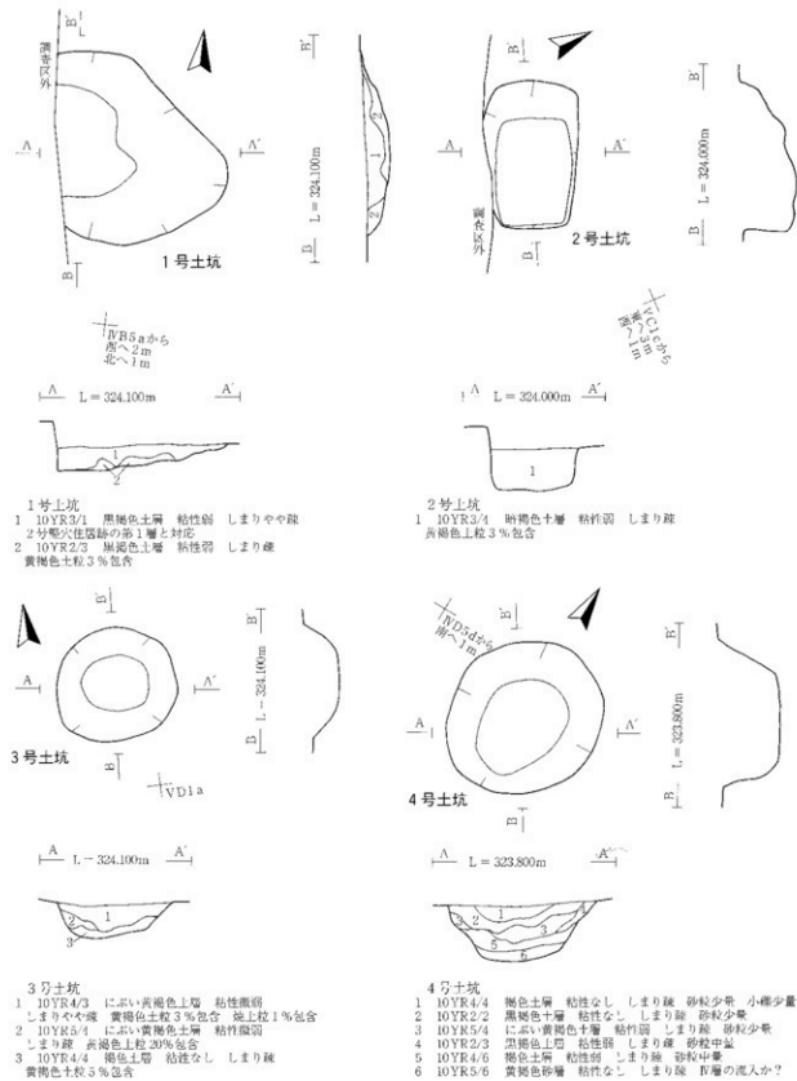
[位置・検出状況]IV B グリッドに位置する。V層掘削後のVI層中部でにぶい赤褐色土のプランを検出した。平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。

[被熱土]しまりのあるVI層が熱変色したと考えられる。被熱土1層はにぶい赤褐色土層、被熱土2は極暗赤褐色土で黒褐色土を少量包含している。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。

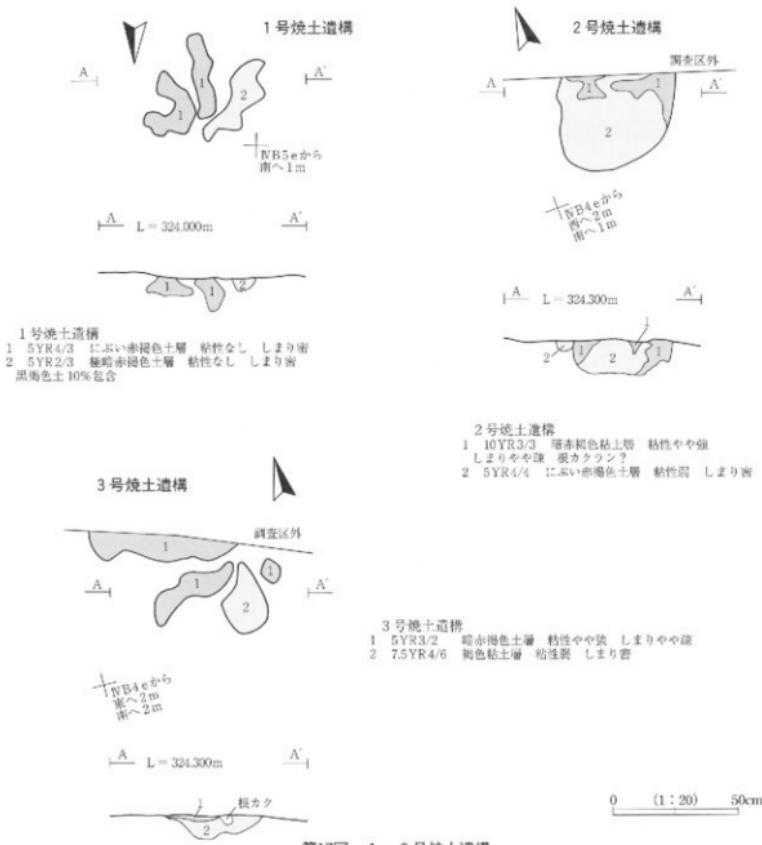
[形状]平面形は南北に筋状にのびる。

[重複関係]なし。

[計測値]検出面標高：323.600m



第16図 1~4号土坑



第17図 1～3号焼土遺構

遺物 なし。

時期 V層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

2号焼土遺構

遺構（第17図、写真図版7）

[位置・検出状況] IVBグリッドに位置する。V層掘削後のVI層中部で暗赤褐色土のプランを検出した。平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。

[被熱土] しまりのあるVI層が熱変色したと考えられる。被熱土1層は暗赤褐色土層、被熱土2層にはにぶい赤褐色土で黒褐色土を少量包含している。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。

[形状] 北側は調査区外へ続いている。平面形は円形を呈すると考えられる。

[重複関係] なし。

[計測値] 検出面標高 : 324.130m

遺物 なし。

時期 V層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

3号焼土遺構

遺構（第17図、写真図版8）

[位置・検出状況] IVBグリッドに位置する。V層掘削後のVI層中部で暗赤褐色上のプランを検出した。

平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。

[被熱土] しまりのあるVI層が熱変色したと考えられる。被熱土1層は暗赤褐色土層、被熱土2層はにぶい赤褐色土である。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。

[形状] 北側は調査区外へ続いている。平面形は筋状である。

[重複関係] なし。

[計測値] 検出面標高 : 324.090m

遺物 なし。

時期 V層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

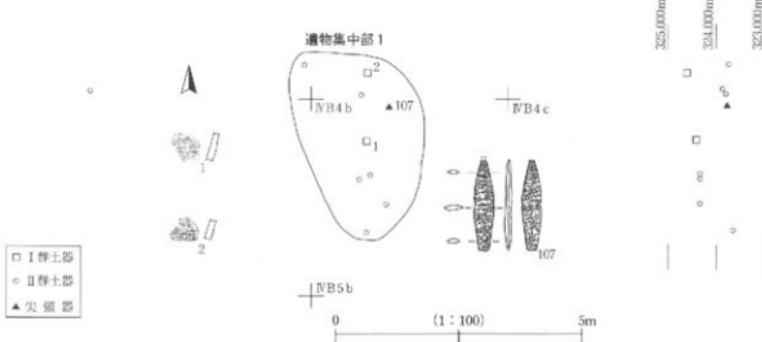
（4）遺物集中部

第VI層に垂直分布のピークをもつ遺物集中部を7ヵ所設定した。範囲認定は2mの範囲に、5点以上の遺物があることとした。

遺物集中部1（第18図）

第2表 遺物集中部1組成表

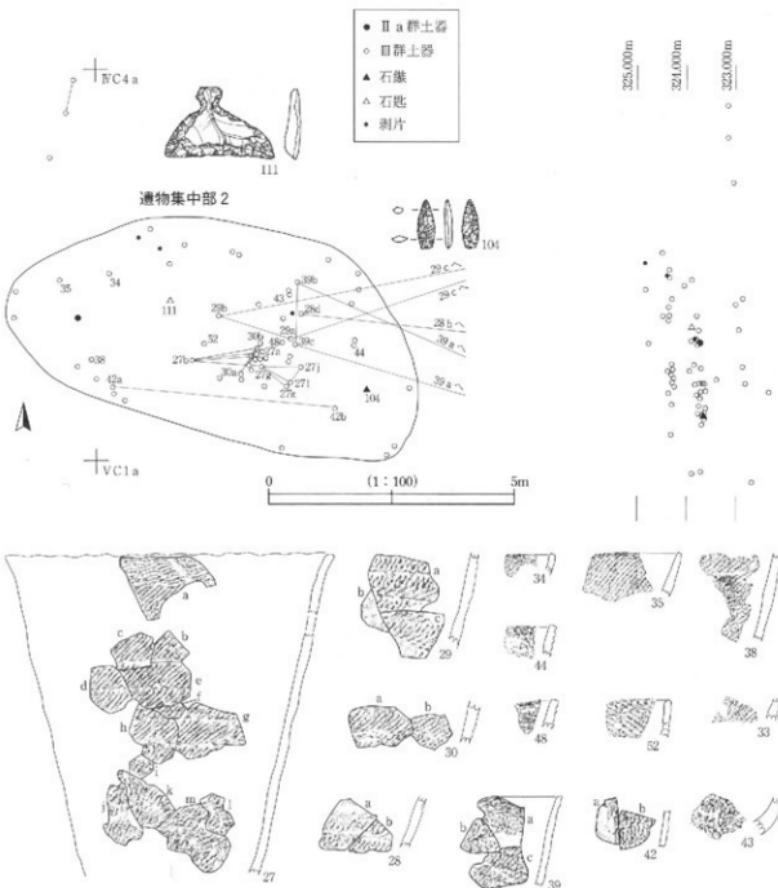
石 材	I 群 土 器	II a 群 土 器	II b 群 土 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 鐵 鑿	石 匙 器	搔 器	削 器	磨 形 石	剝 片	碎 片	特 殊 磨 石	磨 石 D	合 計
頁岩14	2			6												8
合 計	2			6	1											9



第18図 遺物集中部1

第3表 遺物集中部2組成表

石 材	I	II	III	IV	尖 頭 器	石 頭 器	攝 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石	D	合 計
	a 群 上 器	b 群 上 器	群 上 器	群 上 器											
															58
頁岩3											1				1
頁岩4											1				2
頁岩8											1				1
頁岩15						1									1
合計	1		57			1	1				3				63



第19図 遺物集中部2

[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIVB 4 b グリッドに集中する。標高324.000m付近に垂直分布ピークを持つが、上下に分散している。

[遺物] I群土器2点、III群土器6点、尖頭器1点の計9点で構成される。焼土遺構や石器製作残滓を伴わない。

[時期] 繩文時代早期～前期前半に形成されたと考えられる。

遺物集中部2（第19図）

[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIVC 5 a グリッドに集中する。標高324.000m付近に垂直分布ピークを持つが、上下の分散は比較的少ない。

[遺物] II a群土器1点、III群土器61点、石鎌1点、石匙1点、剥片3点の計67点で構成される。分布範囲の西側に3号焼土遺構がある。縫維の多量に混入するIII群土器が主体を占める。土器28・29・39は隣接する遺物集中3との遺構間接合関係を有する。

[時期] 繩文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

遺物集中部3（第20図）

[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIVC 5 d・5 e グリッドに集中し、遺物集中2と隣接する。標高323.700m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。中心部に尖頭器製作残滓の剥片・碎片・楔形石器が、周辺部にII群土器と削器、磨石Dなどのトゥールが分布している。分布範囲の東側に3号土坑がある。

[遺物] II a群土器3点、III群土器24点、尖頭器1点、石鎌2点、搔器1点、削器2点、楔形石器1点、石核1点、剥片29点、碎片8点、特殊磨石1点、磨石D 1点の計74点で構成される。土器は破片資料のみでIII群土器が主体である。石器では黒色真岩1を母岩として尖頭器製作が行われている。III群土器の一部は遺物集中部2との遺構間接合関係を有する。

[時期] 繩文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

第4表 遺物集中部3組成表

石 材	I 群 上 器	II a 群 土 器	II b 群 土 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 鎌	石 匙	搔 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石	D	合 計
	3	22															25
真岩1														2			2
真岩2													1				1
真岩4													1				1
真岩6						1							1	1			3
真岩9									1				1	5	3		10
真岩12						1											1
真岩13																	0
真岩16								1									1
黒色真岩1											1		18	4			24
チャート1						1						1					1
安山岩														1	1		
砂岩														1		1	
合計	3	22	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	29	8	1	1	71

遺物集中部4（第21図）

[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIVE 5 a・VE 1 a グリッドに集中している。標高323.000m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。遺物集中6よりも南側の標高の低い場所に位置する。



第20図 遺物集中部 3

[遺物] II a 群土器12点、II b 群土器2点、III群4点、特殊磨石1点の計19点で構成される。石器製作残滓は出土していない。II a 群土器の9は遺物集中6と遺構間接合関係を有する。

[時期] 繩文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

第5表 遺物集中部4組成表

石 材	I 群 土 器	II a 群 土 器	II b 群 土 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 鑑	石 匙	石 器	搔 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石 D	磨 石	合 計
		12	2	4													18	
閃錫器																1		1
合 計		12	2	4												1		19

遺物集中部5（第21図）

[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIV E 4 b グリッドに集中している。標高323.000m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。遺物集中4に隣接する。

[遺物] II a 群土器9点、II b 群土器3点の計12点で構成される。石器製作残滓は出土していない。遺跡内でII b 群土器の数量が最も多い。

[時期] 繩文時代早期後半に形成されたと考えられる。

第6表 遺物集中部5組成表

石 材	I 群 土 器	II a 群 土 器	II b 群 土 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 鑑	石 匙	石 器	搔 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石 D	磨 石	合 計
合 計		9	3														12	

遺物集中部6（第22図）

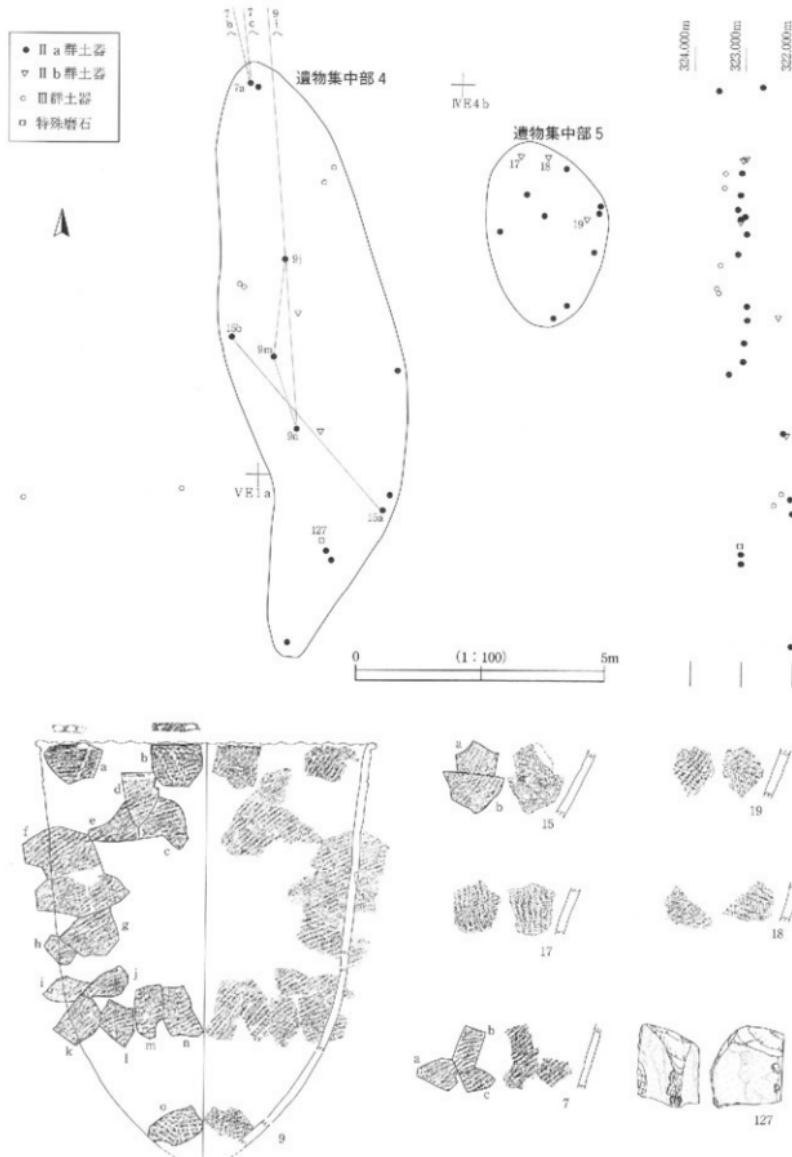
[位置・分布] 緩やかな傾斜の続くIV D 2 e・IV E 2 a グリッドに集中している。標高323.500m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。窪地状の範囲にII a 群土器がまとまって出土している。集中部周辺に尖頭器、剥片が出土している。

[遺物] II a 群土器72点、II b 群土器2点、III群土器8点、磨石D 1点の計83点で構成される。石器製作残滓は出土していない。II a 群の出土数が主体を占めるものの、個体数は少ない。II a 群土器の9は遺物集中4と遺構間接合関係を有する。

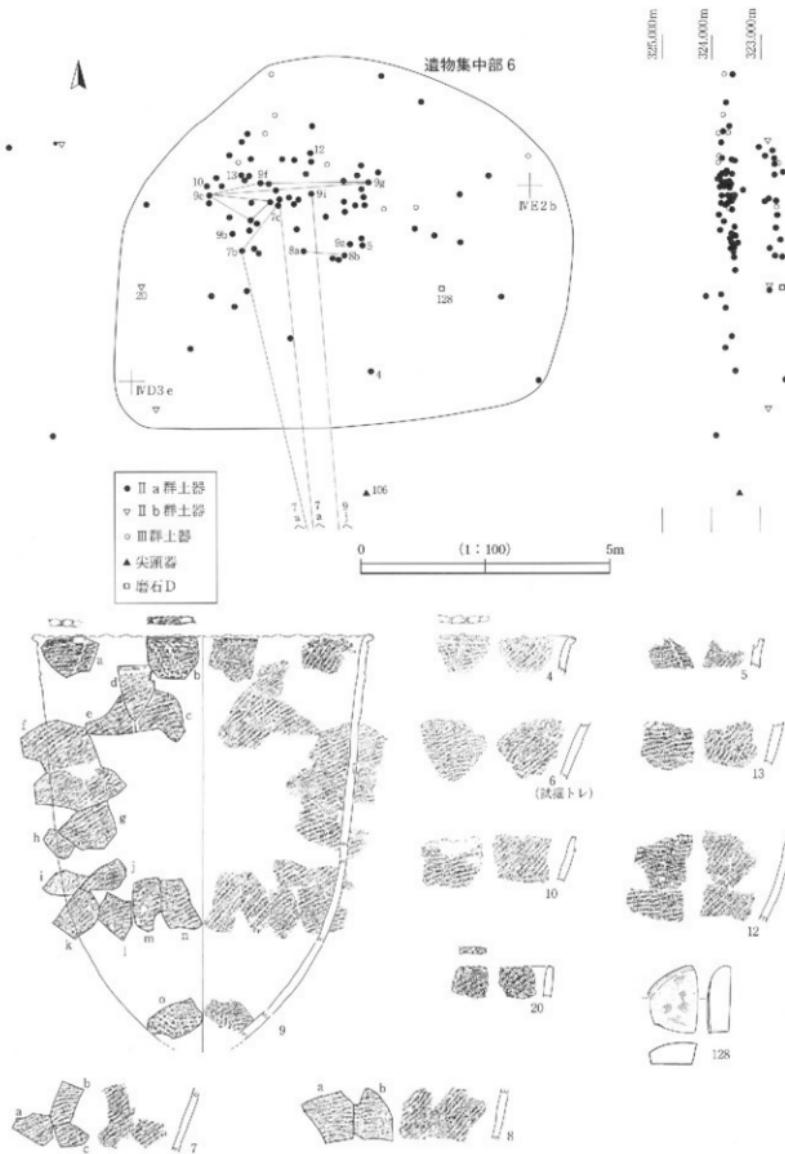
[時期] 繩文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

第7表 遺物集中部6組成表

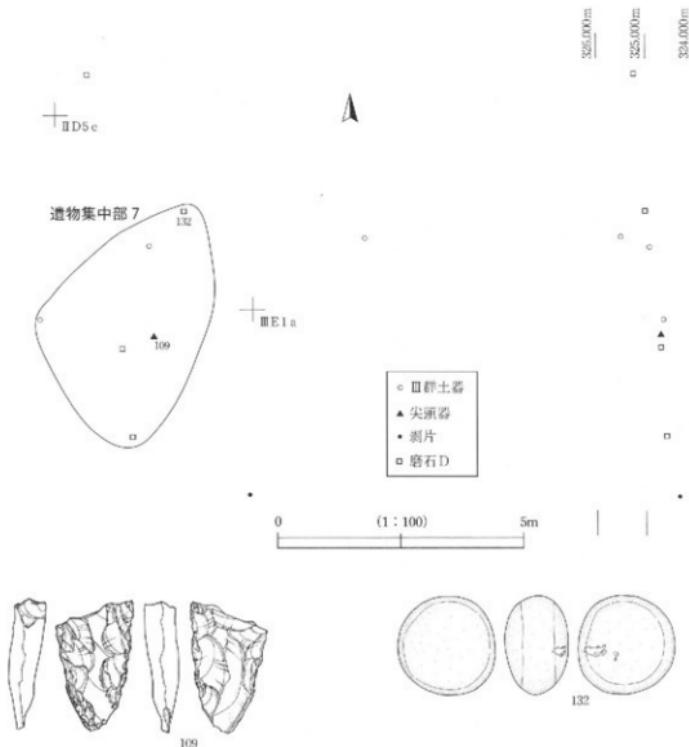
石 材	I 群 土 器	II a 群 土 器	II b 群 土 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 鑑	石 匙	石 器	搔 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石 D	磨 石	合 計
		72	2	8													82	
砂 岩																1	1	
合 計		72	2	8												1	83	



第21図 造物集中部 4・5



第22図 遺物集中部 6



第23図 遺物集中部 7

遺物集中部 7 (第23図)

[位置・分布] やや傾斜のあるIII D 1 e グリッドに集中している。標高324.500m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。

[遺物] III群土器2点、尖頭器1点、磨石D 3点の計6点で構成される。分布域周辺の単独出土遺物はIII群土器、石錐、剥片である。石器製作残滓は出土していない。

[時期] 縄文時代前期前半に形成されたと考えられる。

第8表 遺物集中部 7 組成表

石材	I 群 上 器	II a 群 上 器	II b 群 上 器	III 群 土 器	IV 群 土 器	尖 頭 器	石 錐	石 鏃	搔 器	削 器	横 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石	磨 石 D	合 計
					2												2
黒色頁岩3						1											1
花崗岩																	2
砂岩																	1
合計					2	1										3	6

3 遺 物

(1) 繩文土器 (第24~27図、写真図版9~13)

縩文早期~前期・晚期の土器が出土している。完形まで復元できる資料はなく、すべて破片資料である。I群土器（早期前葉）2点、IIa群土器（早期後葉）105点、IIb群土器（早期末）11点、III群土器（前期前半）128点、IV群土器（晚期）16点出土している。

I群土器の1、2は押型文系土器である。日計式相当と考えられる。

IIa群土器は赤御堂式相当で纖維を含まないか、わずかに含む表裏縩文土器である。胎土に小礫、砂粒が見られることも特徴である。器厚は6~9mmの範囲が多い。0段多条を多様している。3~13は同一個体と考えられる。内外面とも附加条LR縩文を施し、口唇部に指頭状圧痕、口縁部に捲糸圧痕が見られる。口縁部は個体数が少ないものの、2条を単位と圧痕で口縁部文様帯を形成し、横方向と斜方向の施文で鋸歯状のモチーフを描出していると考えられる。遺物集中4~6からまとまって出土している。

IIb群は早稻田5類相当で纖維を多く含む表裏縩文土器である。やや薄手の資料もあるが、IIa群土器に比べて纖維混入量が圧倒的に多く厚手である。遺物集中5でまとめて出土しているが、主体は単独出土資料である。21は外面に非結束羽状縩文を施文している。

III群土器は前期前半の上器を一括したが、纖維を多量に含む底上器が出土している。0段多条が主体である。遺物集中部2~3で多く出土している。27~30は同一個体で口縁部には結節回転文が見られ、胴部には幅3cm程度のLR縩文を横位に施文している。31は尖底部でLR縩文を施す。胎土は27~30に似るが同一個体ではない。34~36は同一個体でLR縩文を施す。39~42は同一個体で口縁部に結節回転文を施す。43は尖底部で39~42と類似の胎土である。44は剥落が著しいが、押引沈線を横走させている口縁部片で、早稻田6類相当である。45~47は結節回転文を施す。52~53はIII群に含めたが、纖維の混入が明確でない。52については早期前葉の可能性を指摘いただいている。

IV群土器はII層（表土）~III層下部で出土しており、集中部を形成していない。54~55は同一個体で大洞A'式の壺形土器の口縁部と胴部である。56~68は粗製土器である。

(2) 石 器 (第28~31図、写真図版14~17)

石器は大半がVI層で出土し、早期~前期に位置づけられる。尖頭器4点、石鏃5点、石匙2点、搔器2点、削器2点、楔形石器1点、石核2点、剥片38点、碎片9点、特殊磨石5、磨石7点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、疊石器には砂岩、安山岩、閃綠岩が利用されている。

第9表 縩文時代遺物組成表

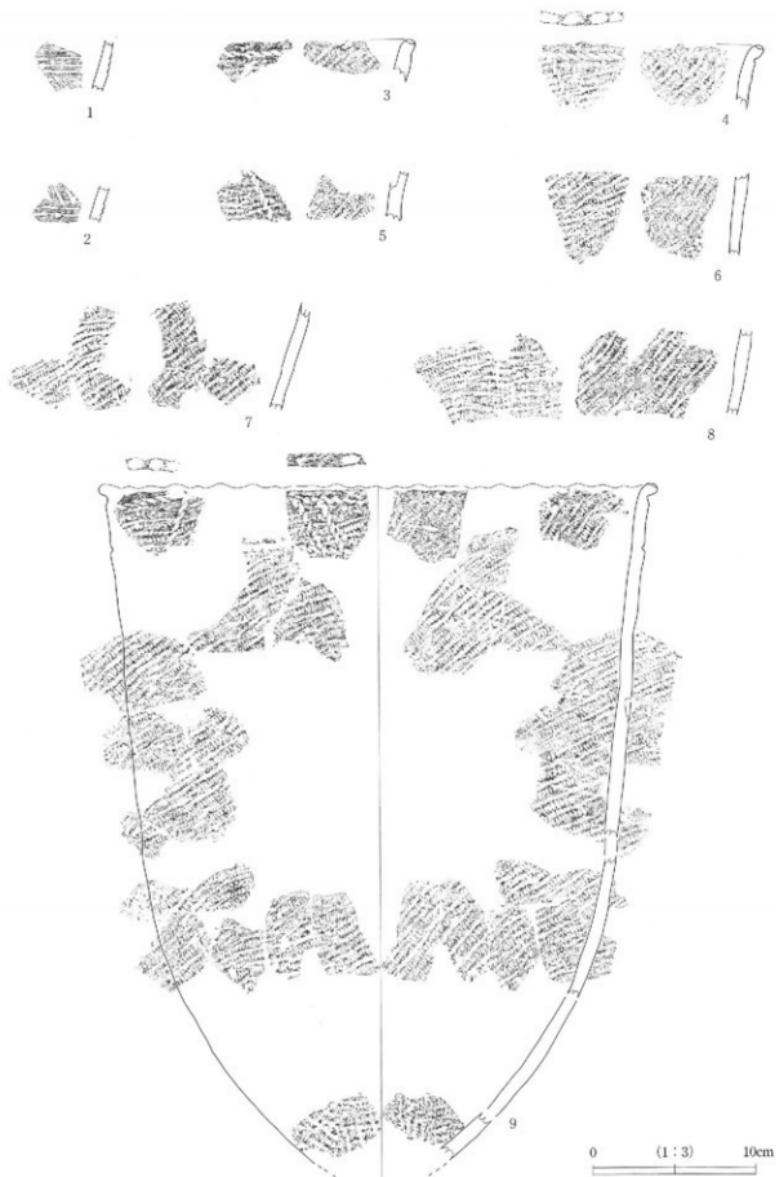
石 材	I 群 土 器 25	II a 群 土 器 25	II b 群 土 器 25	III 群 上 器 25	IV 群 上 器 25	尖 頭 器	石 鏃	石 匙	搔 器	削 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石	磨 石	合 計
遺物集中部1	2			6		1											9
遺物集中部2		1		57			1	1					3				63
遺物集中部3	3		22		1	2		1	1	1	1	1	29	8	1	1	71
遺物集中部4	12	2	4												1		19
遺物集中部5		9	3														12
遺物集中部6	72	2	8												1		83
遺物集中部7			2			1									3	6	
遺物集中部8	8	4	29	16	1	2	1	1	1			1	6	1	3	2	76
合計	2	105	111	128	16	4	5	2	2	2	1	2	38	9	5	7	329

第10表 石器・石材組成表

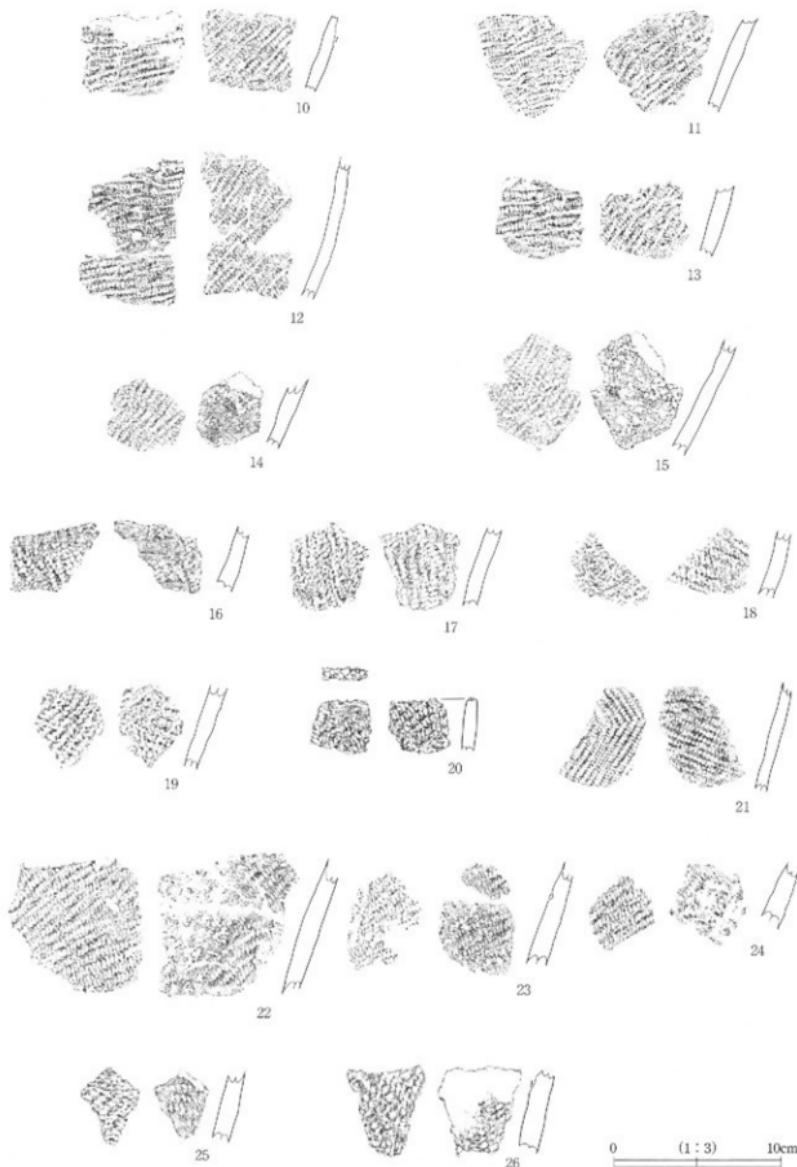
	尖 頭 器	石 頭	石 頭	様 器	雨 器	楔 形 石 器	石 核	剥 片	碎 片	特 殊 磨 石	磨 石 D	点 数 合 計	重 量 合 計
黒色頁岩 1	1 3.94					1 4.26		18 22.65	4 0.81			24	31.66
黒色頁岩 2								1 20.57				1	20.57
黒色頁岩 3	1 38.91		1 19.47				1 5.06		1 0.56			3	63.47
頁岩 1								2 1.05				2	1.05
頁岩 2								2 1.52				2	1.52
頁岩 3								1 0.6				1	0.6
頁岩 4		1 10.52						3 5.01				4	15.53
頁岩 5									1 0.44			1	0.44
頁岩 6	1 1.36							1 0.39	1 0.28			3	2.03
頁岩 7								1 8.7				1	8.7
頁岩 8								1 2.15				1	2.15
頁岩 9		1 23.3				1 6.45		5 16.62	3 1.73			10	48.1
頁岩 10	1 2.39											1	2.39
頁岩 11		1 13.73										1	13.73
頁岩 12	1 1.01											1	1.01
頁岩 13				1 4.53								1	4.53
頁岩 14	1 1.42											1	1.42
頁岩 15		1 0.89										1	0.89
頁岩 16				1 4.91								1	4.91
頁岩 17						1 27.24						1	27.24
花崗岩										1 243.03	1 243.03		
安山岩										3 1119.56	3 1119.56		
砂岩										2 1329.98	4 2081.69		3411.67
閃綠岩										2 787.65		2	787.65
凝灰岩 1								1 5.15				1	5.15
チャート 1								1 8.34				1	8.34
チャート 2		1 1.4										1	1.4
チャート 3	1 15.01											1	15.01
点数合計	4 59.31	5 7.05	2 24.25	2 42.77	2 9.44	1 4.26	2 33.69	38 97.81	9 3.26	4 2117.63	8 3444.28	77	5843.75
重量合計													

上段：点数

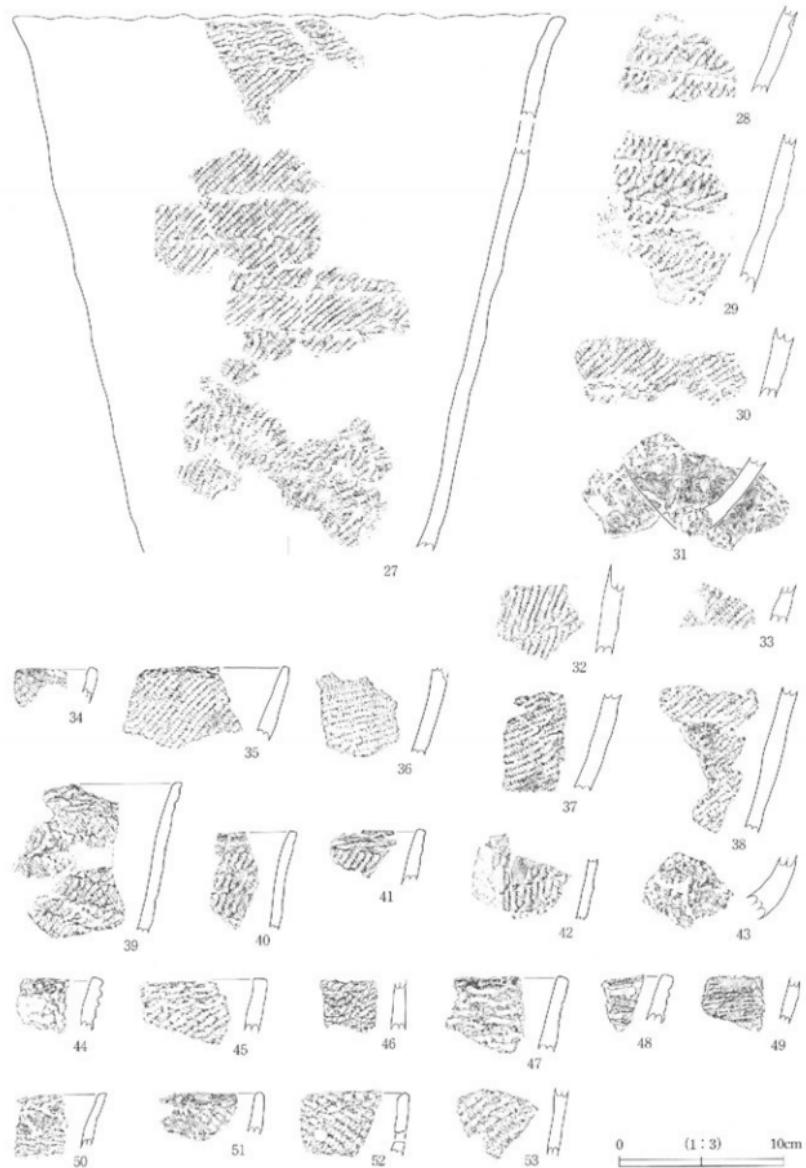
下段：重量 (g)



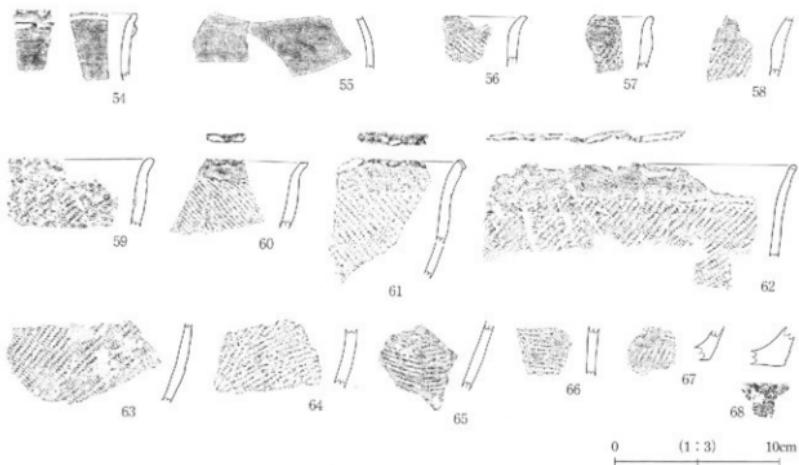
第24図 繩文土器 1 (I + IIa群)



第25図 繩文土器 2 (II a + II b群)



第26図 繩文土器 3 (Ⅲ群)



第27図 繡文土器4(IV群)

狩猟具は石鎌と尖頭器が出土している。101～104・105は石鎌で、104・105は尖基鎌である。102・104・105はⅢ群土器主体の遺物集中部2・3から出土している。106～109は尖頭器である。106はチャート製で表面左側縁部と裏面右側縁部に調整が見られる。108は黒色頁岩1製で先端部を欠損する。遺物集中3出土である。109は黒色頁岩3製で先端部を欠損する。遺物集中7出土。

スクレイバー類では石匙、搔器、削器が出土している。110は頁岩4製の石匙で縦型である。111は遺物集中部2出土の石匙で横型である。112・113は搔器で、112は上下両端部に刃部を形成している。114・115は削器で刃部の磨耗が見られる。

116は楔形石器で右側面を折断されている。117は両極打撃によって消費の進行した石核である。118～120・122は黒色頁岩1の剥片で尖頭器製作に伴うものと考えられる。

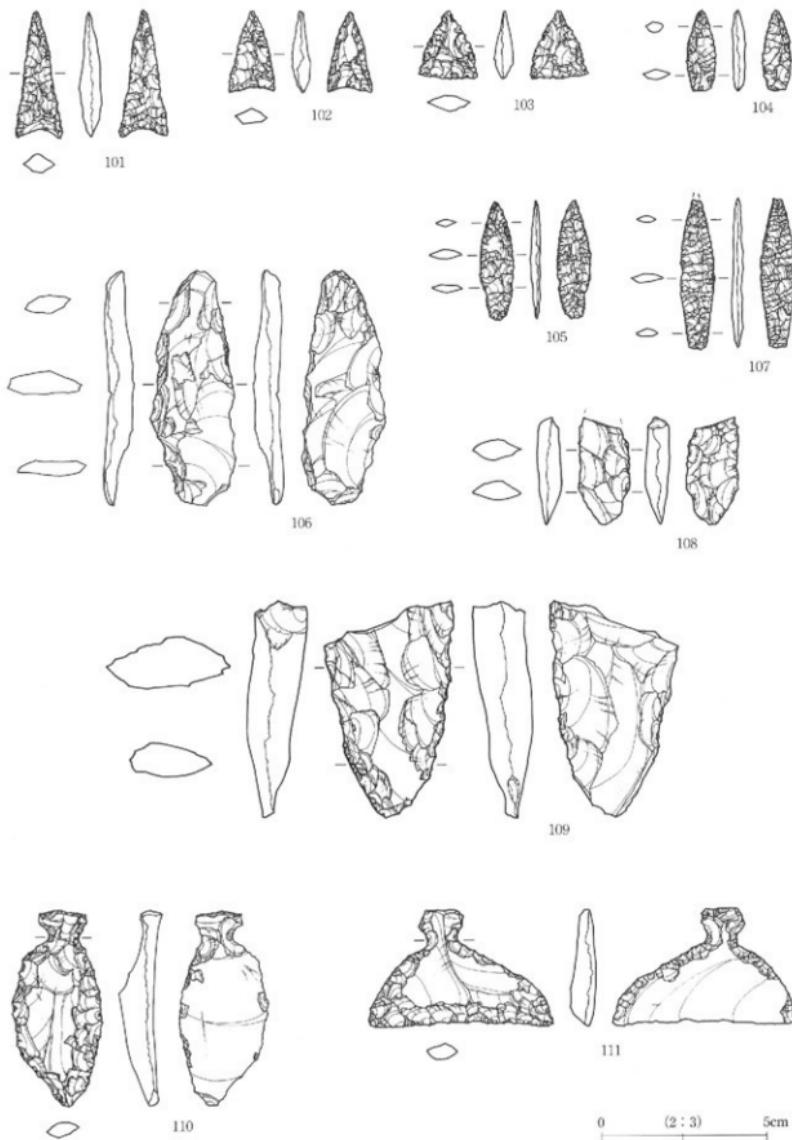
礫石器は特殊磨石(123～127)と磨石D類(128～132)が出土した。124は3号竪穴住居跡カマド芯材として転用されていた。磨面は正面1面のみである。125は正面上下両端から器体整形と思われる調整を施す。磨面は両側面に有する。128は遺物集中6出土で破片である。132は遺物集中部7出土で、裏面に黒色付着物が見られる。

(3) 土 師 器 (第32図、写真図版18)

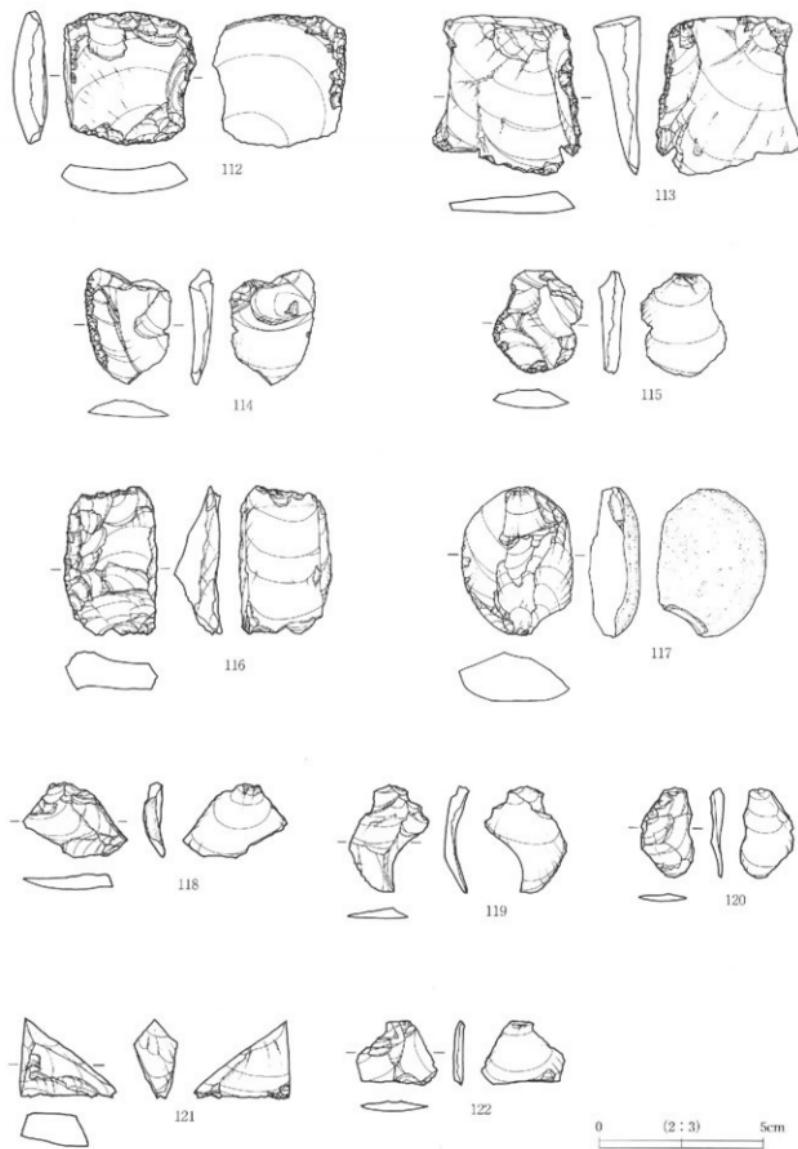
82点出土し、2号竪穴住居跡で5個体、3号竪穴住居跡で4個体の計9個体の小形甕に集約される。2号竪穴住居跡出土資料はナデ調整を基本とし、201には底部ヘラナデ調整、202・203・205の底部には木葉痕が見られる。201～203は球胴に近い形態である。3号竪穴住居跡出土資料にはケズリ調整が見られる。207は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、胴下部ケズリ調整が見られる。

(4) その他の遺物

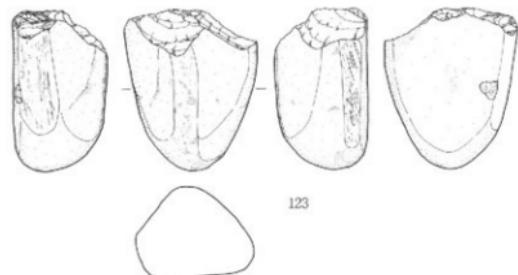
2号竪穴住居跡から炭化物、炭化種実(V章1節参照)、3号竪穴住居跡からは水晶製の碎片、炭化物、骨片が出土している。



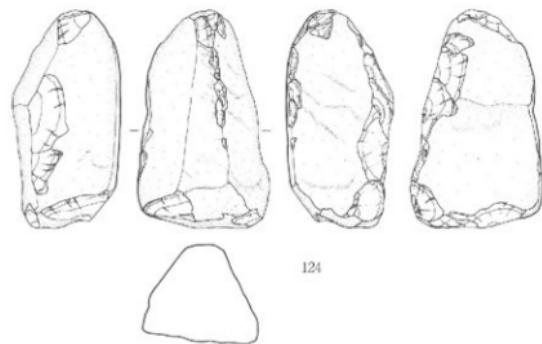
第28図 石器 1



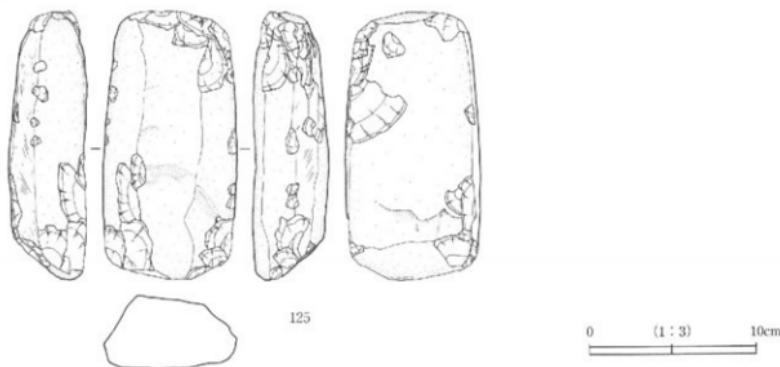
第29図 石器 2



123



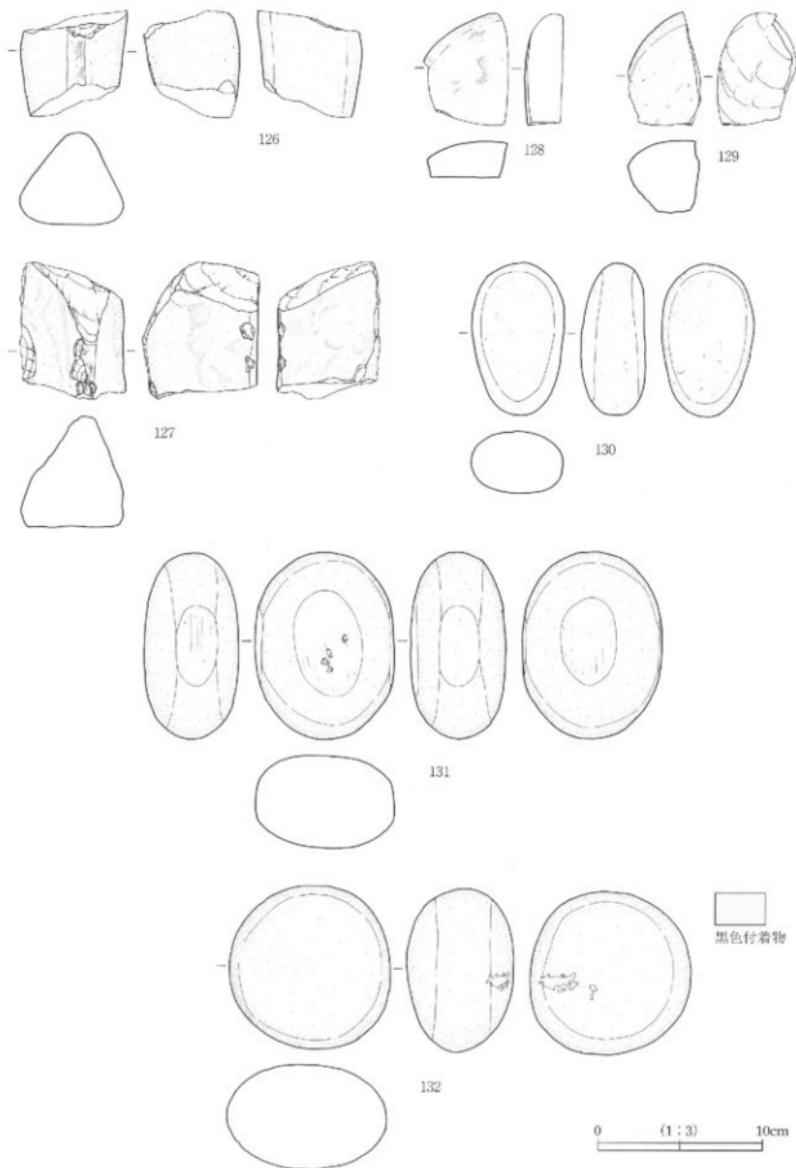
124



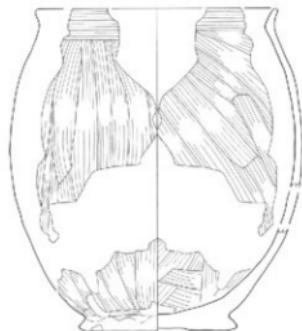
125

0 (1 : 3) 10cm

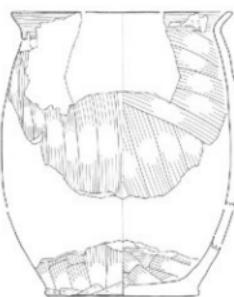
第30図 石器 3



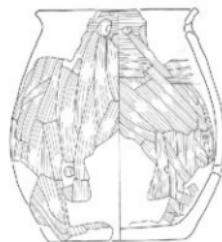
第31図 石器 4



201



202



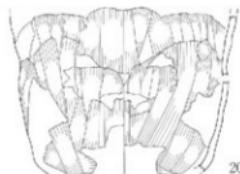
203



204



205



206



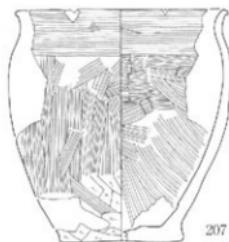
207



208



209



207

0 (1 : 3) 10cm

第32図 土師器

第11表 純文土器觀察表①

掲載	類型	層位：地層	グリッド	断面			文様・調整	粘土		備考	
				X	Y	Z		砂粒	小砾		
1	1	I	VI層：集中1	NB4 b	-3872.848	84025.118	321.410	細粒土			
2	2	I	VI層：集中1	NB3 b	-3871.481	84025.161	321.467	細粒土			
3	3	IIa	VI層	VE1 e	-3863.487	84079.248	323.590	口唇部： 指彌状圧痕、 L1縫部： 撫糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少	微量
4	4	IIa	VI層：集中6	NE2 a	-3867.814	84080.828	323.508	口唇部： 指彌状圧痕、 口縫部： 撫糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少	微量
5	5	IIa	VI層：集中6	NE2 a	-3865.184	84080.630	323.457	口唇部： 指彌状圧痕、 口縫部： 撫糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
6	6	IIa	試掘トレス				内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量	
7	7	IIa	VI層：集中4	ND3 e	-3871.983	84079.763	322.633	内外面付加条			
7	7	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3865.291	84078.237	322.703	LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
7	7	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.206	84079.177	322.675				
8	8	IIa	VI層：集中6	NE2 a	-3865.173	84080.406	322.686	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
8	8	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3865.334	84079.469	323.575				
9	9	IIa	VI層：集中4	NE5 a	-3879.025	84080.691	322.224				
9	9	IIa	VI層：集中4	NE5 a	-3879.723	84082.379	323.058				
9	9	IIa	VI層：集中4	NE4 a	-3875.539	84080.466	323.485				
9	9	IIa	VI層：集中6	NE1 a	-3865.436	84080.319	323.560				
9	9	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.207	84077.585	323.760				
9	9	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.672	84078.389	323.726				
9	9	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3863.942	84078.600	323.761				
9	9	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.314	84078.788	323.629	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
9	9	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.976	84078.084	323.560				
9	9	IIa	VI層	NE5 a	-3863.973	84080.728	323.595				
10	10	IIa	VI層：集中6	ND2 e	-3864.026	84077.510	323.734	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
11	11	IIa	VI層：集中6	ND1 e	-3863.485	84078.407	323.754	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
12	12	IIa	VI層：集中6	ND1 e	-3863.303	84079.586	322.755	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
13	13	IIa	VI層：集中6	ND1 e	-3863.816	84078.214	323.734	内外面付加条 LR(0段多条) +LR	微量	少量	微量
14	14	IIa	VI層	VD2 b	-3894.486	84073.436	322.384	内外面RL	微量		微量
15	15	IIa	VI層：集中4	VE1 a	-3880.703	84082.641	322.032	内外面RL	微量		微量
15	15	IIa	VI層：集中4	VE1 a	-3880.550	84082.797	323.028				
16	16	IIb	VI層	III E5 b	-3855.891	84087.587	323.603	RL	微量	微量	微量
17	17	IIb	VI層：集中5	NE4 b	-3873.421	84085.195	322.988	RL	微量	微量	微量
18	18	IIb	VI層：集中5	NE4 b	-3873.453	84085.748	323.085	RL	微量	微量	微量
19	19	IIb	VI層：集中5	NE4 b	-3874.703	84086.563	323.095	RL	微量	微量	微量
20	20	IIb	VI層：集中6	ND2 e	-3866.058	84076.212	322.820	非筋状羽状 繩文LR	微量		微量
21	21	IIb	VI層	NE3 b	-3870.087	84086.372	323.162	LR	微量	微量	微量
22	22	IIb	VI層	VD2 d	-3887.917	84075.164	321.758	LR	微量	少量	微量
23	23	IIb	VI層	VD2 d	-3887.456	84075.200	322.858	LR	微量	少量	微量
24	24	IIb	VI層	VD2 d	-3887.896	84075.616	322.848	LR	微量	少量	微量
25	25	IIb	VI層	NE5 a	-3879.806	84081.359	322.171	LR	微量	少量	微量

第12表 繪文土器觀察表(2)

器種	類型	肩部:遺構	グリッド	座標			文様・調査	胎土	備考
				X	Y	Z			
26	25	II b	VII層:集中6	IV D 3 d	-3898.729	84076.493	322.829	LR	微量
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 b	-3878.090	84044.171	324.228		少量
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.731	84043.268	324.225		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.810	84043.396	324.228		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.862	84043.160	324.242		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.922	84042.954	324.225	口縁部: 粘附圓輪文	微量
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.017	84043.101	323.597	網部: LR LR(0段多条)	少量
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.832	84043.224	323.583		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.072	84043.346	323.661		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.480	84043.856	323.590		
27	24	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.424	84043.909	323.596		
27	24	III	VII層: NF 5 e	-	-3878.193	84116.014	323.598		
27	24	III	VII層: NF 5 e	-	-3878.263	84116.090	323.650		
28	28	III	VII層:集中2	IV C 5 b	-3877.003	84044.156	323.805	LR(0段多条)	微量 少量 少量
28	28	III	VII層:集中3	IV C 5 c	-3878.592	84068.835	323.805		
29	29	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.055	84042.478	323.856		
29	29	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.004	84043.947	323.805	LR(0段多条)	微量 少量 少量
29	29	III	VII層:集中3	IV C 4 c	-3876.598	84049.282	324.065		
30	30	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.807	84043.360	324.271		
30	30	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.231	84042.962	323.682	LR(0段多条)	微量 少量 少量
31	31	III	VII層: NB 4 e	-	-3872.870	84031.408	324.142		
31	31	III	VII層: NB 4 e	-	-3872.221	84031.536	324.158	LR(0段多条)	微量 少量 実施
32	32	III	VII層:集中3	VD 1 a	-3881.069	84060.018	323.508	LR(0段多条)	微量
33	33	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.525	84042.956	323.668	LR(0段多条)	微量
34	34	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3876.418	84040.262	322.867	LR(0段多条)	微量
35	35	III	VII層:集中2	ND 5 e	-3876.392	84039.269	322.971	LR(0段多条)	微量
36	36	III	表床	-	-	-	LR(0段多条)	微量	
37	37	III	VII層: NF 5 a	-	-3836.547	84082.287	325.452	LR(0段多条)	微量
38	38	III	VII層:集中2	IV D 5 e	-3877.941	84039.903	323.750	LR(0段多条)	微量
39	39	III	VII層:集中2	IV C 5 b	-3876.314	84044.109	324.444	口縁部: 粘附圓輪文	
39	39	III	VII層:集中2	IV C 5 c	-3877.652	84044.053	324.530	網部: 粘附圓輪文	微量
39	39	III	VII層:集中3	VC 1 d	-3880.307	84063.519	323.742	LR(0段多条)	少量
40	40	III	VII層: NB 4 e	-	-3873.723	84031.064	323.021	LR(0段多条)	微量
41	41	III	VII層:	-	-	-	LR(0段多条)	微量	
42	42	III	VII層:集中2	IV C 5 b	-3878.933	84044.837	324.277	LR(0段多条)	微量
42	42	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3878.524	84040.396	323.715		
43	43	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3876.613	84043.925	324.366	LR(0段多条)	微量
44	44	III	VII層:集中2	IV C 5 c	-3877.630	84044.745	323.912	押引沈跡	微量
45	45	III	VII層: NE 2 a	-	-3864.460	84081.747	322.669	粘附圓輪文	微量
46	46	III	VII層: NB 3 b	-	-3852.757	84085.937	323.857	粘附圓輪文	微量
47	47	III	VII層:集中3	VD 1 a	-3881.382	84060.236	324.170	粘附圓輪文	微量 少量
48	48	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.577	84083.779	324.265	粘附圓輪文	微量
49	49	III	VII層: III E 1 a	-	-3850.680	84087.831	323.567	粘附圓輪文	微量
50	50	III	VII層:集中3	IV C 5 c	-3879.297	84086.352	324.841	LR?	微量
51	51	III	VII層: ND 5 b	-	-3893.080	84082.597	322.428	LR?	少量
52	52	III	VII層:集中2	IV C 5 a	-3877.804	84042.075	323.568	LR	微量
53	53	III	VII層:集中3	IV C 5 e	-3879.210	84069.390	323.512	LR(0段多条)	微量
54	54	IV	表床	-	-	-	口縁部沈跡 ミガキ	微量	
55	55	IV	VII層:	IV D 5 b	-3857.312	84087.206	323.851	ミガキ	微量
55	55	IV	VII層:	IV D 5 e	-3855.528	84079.352	324.045		
56	56	IV	VII層:	IV E 4 a	-3872.714	84061.913	323.967	RLR	微量
57	57	IV	VII層:	-	-	-	LR	微量	
58	58	IV	VII層:	IV D 5 b	-3878.680	84065.166	323.742	LR	微量
59	59	IV	VII層:	-	-	-	LR	微量	
60	60	IV	VII層:	IV E 5 b	-3857.820	84087.463	323.934	RL	微量
61	61	IV	VII層:	-	-	-	RL	微量	
62	62	IV	VII層:	IV D 5 e	-3838.167	84078.836	325.528	LR	微量
62	62	IV	VII層:	IV D 5 e	-3839.242	84078.691	325.438		
63	63	IV	VII層:	IV F 4 c	-3852.400	84088.227	324.103	LR	微量
64	64	IV	VII層:	-	-	-	LR	微量	
65	65	IV	VII層:	VD 1 d	-3882.020	84075.005	323.239	LR	微量
66	66	IV	VII層:	IV D 4 c	-3834.505	84077.954	325.519	LR	微量
67	67	IV	VII層:	ND 5 a	-3882.281	84060.806	323.907	RL	微量
68	68	IV	VII層:	-	-	-	RL	微量	底部

第13表 石器観察表

掲載	器種	部位:裏構	グリッド	出標			長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	先端角
				X	Y	Z						
101	石鎚	Ⅳ層	ⅢD 3 e	-3830.649	84077.566	326.210	3.89	1.45	0.68	2.39	Sh10	32°
102	石鎚	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 d	-3839.913	84053.183	323.839	2.49	1.39	0.51	1.36	Sh 6	48°
103	石鎚	Ⅳ層	ⅢD 5 e	-3856.572	84079.207	322.823	2.08	1.73	0.55	1.40	Ch 2	
104	石鎚	Ⅳ層;集中2	ⅢC 5 b	-3878.560	84045.471	321.635	2.48	0.87	0.38	0.89	Sh15	
105	石鎚	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 d	-3877.662	84054.570	322.910	3.58	0.99	0.31	1.01	Sh12	
106	尖頭器	Ⅳ層	ⅢE 3 a	-3870.250	84060.711	323.431	7.21	2.48	0.91	15.01	Ch 3	51°
107	尖頭器	Ⅳ層;集中1	ⅢB 4 b	-3872.148	84025.623	323.838	4.58	1.90	0.37	1.42	Sh14	28°
108	尖頭器	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 e	-3877.514	84056.421	323.891	3.31	1.56	0.70	3.94	BSh 1	
109	尖頭器	Ⅳ層;集中2	ⅢD 1 e	-3840.539	84077.398	324.691	6.62	3.91	1.77	38.94	BSh 3	
110	石匙	Ⅳ層	ⅢE 3 b	-3849.243	84084.780	324.195	6.03	2.73	1.25	13.73	Sh11	
111	石匙	Ⅳ層;集中2	ⅢC 5 a	-3876.730	84041.483	323.872	3.59	5.51	0.75	10.52	Sh 4	
112	搔器	Ⅳ層	ⅢE 2 c	-3846.431	84089.659	323.382	4.06	3.95	1.04	19.47	BSh 3	
113	搔器	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 d	-3879.028	84055.877	323.735	4.83	4.22	1.42	23.39	Sh 9	
114	削器	Ⅳ層;集中3	ⅢD 1 a	-3881.382	84060.232	323.470	3.53	2.58	0.69	4.91	Sh16	
115	削器	Ⅳ層	ⅢD 1 b	-3885.377	84078.292	322.327	3.13	2.67	0.74	4.53	Sh13	
116	陶輪鈎片	Ⅳ層;集中3	ⅢD 5 a	-3878.115	84060.859	323.898	4.35	2.81	1.38	16.00	BSh 1	
117	石核	表面					4.57	3.34	1.51	27.24	Sh17	
118	剥片	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 e	-3879.149	84057.533	323.807	2.29	3.19	0.58	2.86	BSh 1	
119	剥片	Ⅳ層;集中3	ⅢC 1 c	-3880.894	84056.802	323.733	3.23	2.51	0.69	2.20	BSh 1	
120	剥片	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 c	-3877.951	84056.503	323.865	2.72	1.71	0.36	1.16	BSh 1	
121	剥片	Ⅳ層	ⅢD 1 d	-3883.065	84074.525	322.831	2.41	2.88	1.15	5.06	BSh 3	
122	剥片	Ⅳ層;集中3	ⅢC 5 c	-3879.640	84056.674	323.785	1.97	2.46	0.31	1.34	BSh 1	
123	特殊磨石	Ⅳ層	ⅢE 3 a	-3881.445	84083.563	324.109	9.92	8.12	5.65	57.16	S.S.	
124	特殊磨石	3号房	VC 2 e	-3884.230	84058.610	323.193	13.40	8.02	6.58	75.62	S.S.	
125	特殊磨石	Ⅳ層;集中3	VC 5 c	-3876.815	84056.226	323.838	16.45	8.12	4.35	88.54	S.S.	
126	特殊磨石	Ⅳ層	VID 3 b	-3909.664	84065.393	320.699	6.61	6.38	3.82	286.59	Dio	
127	特殊磨石	Ⅳ層;集中3	VE 1 a	-3881.434	84081.282	323.039	8.43	6.35	7.12	501.06	Dio	
128	磨石D	Ⅳ層;集中6	VR 2 a	-3866.072	84082.251	322.566	6.91	5.05	2.27	118.13	S.S.	
129	磨石D	Ⅳ層	VID 4 c	-3835.207	84076.644	325.245	7.00	4.45	4.71	176.41	S.S.	
130	磨石D	Ⅳ層	VID 3 a	-3887.472	84081.933	323.740	9.38	5.60	3.94	277.48	An	
131	磨石D	Ⅳ層;集中3	VC 4 c	-3875.463	84049.979	324.091	11.42	8.55	5.71	842.08	An	
132	磨石D	Ⅳ層;集中7	IID 5 e	-3838.014	84078.593	325.043	10.01	9.85	6.47	897.61	S.S.	

第14表 土師器観察表

掲載	器種	部位:裏構	グリッド	調査		口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	容積 (L)	備考
				外周	内面					
201	甕	2号堅穴住居2層	VC 9 c	ナデ	ナデ	14.7	9.8	19.9	2.96	底面ヘラナデ
202	甕	2号堅穴住居2層	VB10h	ナデ・ケズリ	ナデ	13.4	9.4	17.5	1.75	底面木葉痕
203	甕	2号堅穴住居2層	VB10j	ナデ	ナデ	9.7	8.5	14.1	0.95	底面木葉痕、穿孔2ヵ所
204	甕	2号堅穴住居2層	VC 8 d	ナデ	ナデ					
205	甕	2号堅穴住居2層	VC 9 a							底面木葉痕
206	甕	3号堅穴住居2層	VB10i	ナデ	ナデ	13.1				
207	甕	3号堅穴住居6層	VB1 h	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	12.9	7.6	14.2	1.11	
208	甕	3号堅穴住居6層	VB5 g	ケズリ	ナデ					
209	甕	3号堅穴住居6層	VB5 e	ケズリ	ナデ					

V 分析・鑑定

1 千足南遺跡 2号竪穴住居跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

(1) 試料と方法

千足南遺跡は下閉伊郡田野畠村山間部の標高約320mの緩斜面に位置する古代の集落跡である。本遺跡の2号竪穴住居の竪内土壤を水洗選別したところ、若干の炭化種実を出土したため、これらの同定分析をおこなった。

(2) 結果と考察

出土した炭化種実を第15表に示す。アワの焼け膨れた種子をもっとも多く出土し、内顎がついた穀果も出土している。そのほか穀類ではキビ、ヒエを、食用ではシソ属を出土した。スギ、木本の芽は燃料材として持ち込まれ、燃焼した残存と考えられる。また、エノコログサ属、カヤツリグサ科、サデクサ、シロザ近似種は食料と共に混入種子として持ち込まれたか、燃料材に付着してきたと考えられる。

本遺跡で出土した穀類はアワが多く、ついでヒエ、キビを出土しており、イネやムギ類を出土していない。イネやムギの利用がなかったとは言えないが、おもにアワなどの雑穀を使用していたと思われる。東北地方の太平洋側という夏に冷涼になりやすい気候的特徴に加えて、山間部であり水利用が困難と言う理由から、これらの雑穀を頻繁に利用していたとも考えられる。

(3) 出土分類群の形態記載

スギ (*Cryptomeria japonica* Thunb.) 小葉は針状で断面は菱形、基部は太く先端が細く鋭く尖る。

アワ (*Setaria italica* Beauv.) 種子は1mm前後の球形で、基部腹面に種子長半分よりやや大きい丸い胚がある。

エノコログサ属 (*Setaria*) 種子は1mm弱の楕円形でアワに似るが、全体に縦に長く基部が下方に突出している。

キビ (*Panicum miliaceum* L.) 種子は約2mmで丸く幅の広い種子長の半分を超えない大きさの胚がある。

ヒエ (*Echinochloa utilis* L.) 種子は1.5mmほどで、やや角ばった球形、大きく下半部の幅が広い胚がある。

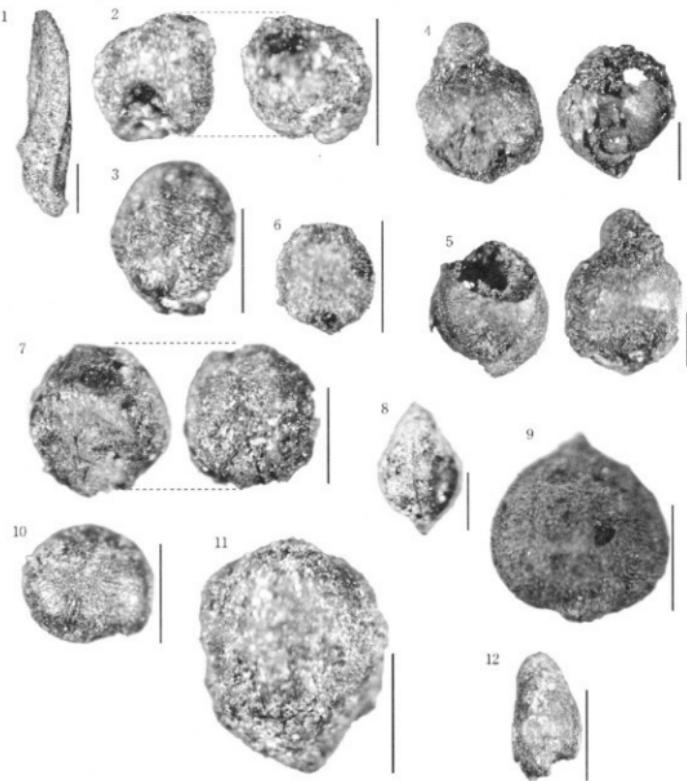
カヤツリグサ科 (Cyperaceae) 果実は三面形で表面の細胞が四角形で規則的に並ぶ。

サデクサ (*Polygonum maackianum* Regel) 果実は扇形の2面形で果皮が厚く、表面の細胞は多角形である。

シロザ近似種 (*Chenopodium cf. album* L.) 種子は扁平な円形でやや光沢があり、細かいしわがあり、一端にへこんだへそから中心に向って不明瞭な浅い溝がはいる。

シソ属 (*Perilla*) 果実は約2mmの球形で下端にやや突出したへそがある。表面は浅いえぐったような大きな網目になるが、出土した果実はやや焼けが激しく一部しか観察できない。

第15表 千足南遺跡 2号竪穴住居跡より出土した炭化種実		
分類群	出土部位	個数
スギ	葉	1
アワ	穀果	3
	種子	149
キビ	種子	5
ヒエ	種子	11
エノコログサ属	種子	8
カヤツリグサ属	果実	1
サデクサ	果実	1
シロザ近似種	種子	1
シソ属	果実	1
木本	芽	1



スケールは 1 mm

- 1 : スギ、葉 2 : アワ、種子(左腹面、右背面)
 5 : キビ、種子腹面 6 : エノコログサ属、種子
 8 : カヤツリグサ属、果実 9 : サデクサ、果実
 11 : シソ属、果実 12 : 木本、芽

第33図 千足南遺跡 2号竪穴住居跡より出土した炭化種実

2 年代測定結果報告

IAA：加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
 - 2) BP年代値は、1950年からさかのばること何年前かを表しています。
 - 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
 - 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。
- 同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したもので

$$\delta^{14}\text{C} = [(14\text{AS} - 14\text{AR}) / 14\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(13\text{AS} - 13\text{APDB}) / 13\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 14AS：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})\text{S}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})\text{S}$

14AR：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})\text{R}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（13AS = $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度（14AN）に換算した上で計算した値です。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$14\text{AN} = 14\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (14\text{AS} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= 14\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (14\text{AS} \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(14\text{AN} - 14\text{AR}) / 14\text{AR}] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\Delta^{14}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) が多く使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようにになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

第16表 年代測定結果

		IAA
IAA Code No.	試 料	B P 年代および炭素の同位体比
IAAA-50962 #1012-1	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畠村字千足 試料形態： 炭化物 千足南 試料1 試料名(番号)：(2号堅穴住居跡カマド内出土) (参考) δ ¹³ C の補正無し	Libby Age (yr BP) : 1,160 ± 40 δ ¹³ C (‰)、(加速器) = -31.37 ± 0.90 Δ ¹⁴ C (‰) = -134.0 ± 4.0 pMC (%) = 86.60 ± 0.40 δ ¹³ C (‰) = -145.3 ± 3.6 pMC (%) = 85.47 ± 0.36 Age (yr BP) : 1,260 ± 30
IAAA-50963 #1012-2	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畠村字千足 試料形態： 炭化物 千足南 試料2 試料名(番号)：(2号堅穴住居跡出土) (参考) δ ¹³ C の補正無し	Libby Age (yr BP) : 1,160 ± 40 δ ¹³ C (‰)、(加速器) = -27.55 ± 0.76 Δ ¹⁴ C (‰) = -134.8 ± 4.2 pMC (%) = 86.52 ± 0.42 δ ¹³ C (‰) = -139.4 ± 3.9 pMC (%) = 86.06 ± 0.39 Age (yr BP) : 1,210 ± 40
IAAA-50964 #1012-3	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畠村字千足 試料形態： 炭化物 千足南 試料3 試料名(番号)：(3号堅穴住居跡カマド内出土) (参考) δ ¹³ C の補正無し	Libby Age (yr BP) : 1,170 ± 40 δ ¹³ C (‰)、(加速器) = -27.47 ± 0.71 Δ ¹⁴ C (‰) = -135.8 ± 3.8 pMC (%) = 86.42 ± 0.38 δ ¹³ C (‰) = -140.2 ± 3.6 pMC (%) = 85.98 ± 0.36 Age (yr BP) : 1,210 ± 30
IAAA-50965 #1012-4	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畠村字千足 試料形態： 骨 千足南 試料4 試料名(番号)：(3号堅穴住居跡床面出土) (参考) δ ¹³ C の補正無し	Libby Age (yr BP) : 280 ± 30 δ ¹³ C (‰)、(加速器) = -22.45 ± 0.71 Δ ¹⁴ C (‰) = -34.8 ± 3.9 pMC (%) = 96.52 ± 0.39 δ ¹³ C (‰) = -29.8 ± 3.7 pMC (%) = 97.02 ± 0.37 Age (yr BP) : 240 ± 30

参考：IAAA-50965の骨に関しては、規定どおりのコラーゲン抽出方法で得られた物質を測定した結果になります。

3 千足南遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科

柴 正敏

千足南遺跡より採集された、火山灰サンプル（7試料）について、以下の観察・分析を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下EPMA）が用いられるようになってきた。本報告では、1試料（試料No.6）の火山ガラスについてEPMA分析を行った（表2）。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15kV、試料電流 3×10^{-9} アンペアである。補正計算はZAF法に従った。

偏光顕微鏡観察によれば、これら7試料は2つのタイプに分けられる（表1）：

- (1) 斜長石、単斜輝石、斜方輝石、石英、黒雲母、ホルンブレンド、鉄鉱からなり、火山ガラスの形態は「バブルウォール型」と「軽石型」からなり、褐色ガラスを含まない。岩片（径1.0～2.0mm）や軽石粒子（径～1.0mm）を含む。これらは、試料1, 2, 3, 4及び5の5試料。珪長質の火碎岩起源と考えられる。
- (2) 斜長石、単斜輝石、斜方輝石、石英、黒雲母、ホルンブレンド、鉄鉱からなり、火山ガラスの形態は「バブルウォール型」と「軽石型」からなり、褐色ガラスを少量含む。岩片（径1.0～2.0mm）や軽石粒子（径～1.0mm）を含む。これらは、試料6及び7の2試料。珪長質の火碎岩起源と考えられる。試料6の褐色ガラスについてEPMA分析を行った（表2）。分析ポイント数は少ないが、既存の十和田aのガラス組成データ（青木・新井、2000；柴ほか、2001）と類似する。

第17表 千足南遺跡出土火山灰

試料 No.	出土地点	層位	ガラス及び鉱物	ガラスの 帰属	特記事項
1	2号住居跡 煙土上部		ガラス（bw, pm）、斜長石、石英、 単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	
2	基本土層	第V 層	ガラス（pm）、褐色ガラス（少量）、 斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、 ホルンブレンド、黒雲母、鉄鉱	基盤、 (To-a)	軽石の発泡度は普通。
3	東壁セク	II層 上部	ガラス（bw, pm）、斜長石、石英、 単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	岩片（径1.0～1.5mm） を含む。
4	東壁セク	IIIb 層	ガラス（bw, pm）、斜長石、石英、 単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	岩片（径1.0～2.0mm） を含む。
5	東壁セク	IV層	ガラス（pm）、斜長石、石英、 単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	ガラスはごく僅か。
6*	東壁セク	V層 上部	ガラス（pm）、褐色ガラス（少量）、 斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、 ホルンブレンド、黒雲母、鉄鉱	基盤、 (To-a)	岩片（径1.0～1.5mm） を含む。
7	東壁セク	V層 下部	ガラス（bw, pm）、褐色ガラス（少量）、 斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、 黒雲母、鉄鉱	基盤、 (To-a)	

pm：軽石型、bw：バブルウォール型、To-a：十和田a テフラ、* EPMA分析を行った試料。

(引用文献)

青木かおり・新井房夫(2000)、三陸沖海底コアK-H94-3、LM-8の後期更新世チラ層序。

第四紀研究、第39巻、107-120。

町田 洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－。東京大学出版会、pp.336。

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)、十和田火山、降下駆石の化学組成変化－一字樽部の一露頭を例として－。

弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。

第18表 千足南遺跡火山ガラスのEPMAデータ

		十和田 a テフラ											
		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
試料番号 6 (東壁セク V層上部)		最小	77.25	0.13	12.36	1.34	0.03	0.31	1.83	3.96	1.44		
		最大	78.21	0.43	12.66	1.82	0.13	0.42	1.99	4.46	1.49		
		平均	77.67	0.27	12.52	1.55	0.09	0.38	1.90	4.15	1.47	4	89.08 WDS
		標準偏差	0.50	0.12	0.14	0.21	0.04	0.05	0.06	0.23	0.02		
青木・新井 (2000)		77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO*全鉄をFeOとして計算した。nは分析の点数を表す。
WDSは、波長分散型EPMAを表す。

4 分析結果の所見

奈良～平安時代の所産と考えられる2号竪穴住居跡ではカマド燃焼部範囲を中心に炭化物が拡散していた。これらはカマド使用に伴う燃料材や食物の残渣と考えられた。そこで、2号竪穴住居跡カマド1内土壤を採取し、古代の森研究室に炭化種実同定分析を依頼した。結果はアワ・ヒエを中心とする雑穀類が主体を占める構成であり、沿岸北部の山間部という立地条件を反映していると考えられる。

年代測定分析は古代の竪穴住居跡出土炭化物3点と骨片1点を加速器研究所に分析委託した。炭化物のAMS年代は1160～1170±40yrBPを示し、曆年較正プログラムOxCal v3.10によれば8世紀後半～10世紀末までのやや幅の広い数値が得られおり、住居内出土遺物の年代観と誤差はない。一方、試料4の骨片については15～17世紀の年代を示し、大きく誤差が生じた。

火山灰分析は2号竪穴住居跡で検出した灰白色粒子とV層の同定を主たる目的として依頼した。2号竪穴住居跡の灰白色粒子は粘土化しており、火山灰の可能性が低いとされた。検出位置からカマド構築材の一部であったと考えられる。V層は田野畠村内の山間部では比較的良好な堆積を確認できる黄褐色火山灰である。沼袋遺跡では千足南遺跡とは同程度の層厚で堆積が認められ、十和田山振火山灰（To-cu：绳文時代前期）と同定されている。また、海岸段丘面に立地する和野ソマナイ遺跡でも陥入穴の埋土でTo-cuを検出している。今回のEPMA分析では十和田a火山灰（To-cu）の可能性が示された。しかし、V層は出土遺物の年代観からTo-cuの可能性が高く、少なくとも古代の火山灰の可能性は低い。分析者の柴氏によれば、To-aとTo-cuの各分析元素の酸化濃度は類似する点も多く、分析結果から十和田系火山灰であることは間違いないが、酸化濃度を上げて再測定を要するとのことであった。今回の分析ではTo-aと確証の得られる試料ではなく、To-cuについても不明となつた。

(米田)

VI ま と め

1 遺 構

調査遺構は、竪穴住居跡3棟、土坑4基、焼土遺構3基である。所属時期は縄文時代早期～前期と奈良～平安時代に大別される。

縄文時代については、上坑2基と焼土遺構3基を確認した。また、2mの範囲内に5点以上の遺物がある場所を遺物集中部とし7ヶ所認定した。遺物集中部は人類の活動による廃棄・遺棄行為か、あるいは自然の営力による堆積・集散で形成されたと見られる。

古代では奈良～平安時代の竪穴住居跡3棟と上坑1基を検出した。3棟とも1辺3m未満、床面積9m²未満の小規模な住居跡である。

(1) 竪穴住居跡

a) 千足南遺跡の竪穴住居跡

3棟のうち、1・2号竪穴住居跡のカマド主軸方向が北、3号竪穴住居跡では東である。一般的な傾向として北カマドは奈良期に多く、1・2号竪穴住居跡が当てはまる。また、2号竪穴住居跡出土の上師器壺はハラナデ調整を基本とし、器形も球胴形に近いため奈良時代の上器の特徴が色濃く見られる。3号竪穴住居跡は遺物から時期を決定する根拠に乏しいものの、3号竪穴住居出土の207土師器壺は胴中央部に最大径を持つ2号竪穴住居跡出土資料と比べると、胴部上半に最大径を持ち、明らかに器形差が見られる。東カマドの存在からも平安期に下る可能性が高い。

1号竪穴住居跡は残存状態が悪く、出土遺物はない。2号竪穴住居跡は遺物の散乱状況やカマドの崩落状況、カマド燃焼部と住居中央の焼土遺構を中心とした炭化物の拡散状況などから、カマド崩落後に炭化物・遺物が北側から南方向に拡散したと考えられる。2号住居跡で特徴的だったのは礫の出土量であり、床面上から出土していたものは少なく、大型のものは住居埋土中位～下位にかけて出土していた。この現象の成因には可能性として廃絶後の捨て場としての利用、屋根材の重石としての大形礫の利用、流水や冬季の霜に伴う床面上出上礫あるいはカマド芯材としての礫の上方への移動などが上げられる。柱穴は1個のみ検出できたが、柱痕跡は径30cmと太い。3号竪穴住居跡は調査区外に未検出部分を残す。遺物出土数は少なく、カマド周辺に散在していた。

b) 居住空間の比較

村内で古代の竪穴住居跡の報告例は和野I遺跡9棟、真木沢遺跡1棟、子木地の台遺跡2棟確認されており、本遺跡の3棟を合わせると計15棟になる。和野I遺跡では住居に伴う遺物が確認されていないため集落の存続時期は不明確だが、住居形態から奈良～平安期と考えられている。真木沢遺跡例は近現代の造道路状遺構に削平されているため、全体形状は不明だが土師器壺片が出土している。子木地の台遺跡では3棟報告されているが、写真等で見る限り、B区2号住居とされた範囲はB区1号住居の貼床部範囲であり、子木地の台遺跡の調査住居跡は2棟と考えられる。この2棟とも北カマドを有する住居跡で、出土した鉄製馬具（鉢具）の年代から奈良～平安期と考えられる。

和野I遺跡の竪穴住居跡は1辺2.8～3.9mの正方形プランの竪穴住居跡で構成され、床面積の最大は2号竪穴住居跡の14.3m²である。また、子木地の台遺跡では1辺4m程度、床面積はA区1号竪穴住居跡の15.17m²が最大である。現在までのところ村内の古代竪穴住居跡は1辺4m未満、床面積16m²未

溝で占められており小規模である。

住居内の柱穴が検出された例は和野Ⅰ遺跡で4棟と千足南遺跡1棟であるが、和野Ⅰではいずれも住居壁近くで検出されており、掘り方が25cm程度である。一方、千足南2号竪穴住居跡の柱穴は壁際ではなく、掘り方の径54cm、柱痕跡の径30cmとやや大きめである。上部構造に関する具体的な資料が出土していないため判然としないが、屋根材を支える手法に村内でもバラエティの認められる可能性が高い。

(2) 土 坑

4基を検出し、内訳は縄文時代2基、古代1基、時期不明1基である。縄文時代の土坑は円形、古代の土坑は不整形である。それらの性格は不明であるが、古代に所属する1号土坑は2号竪穴住居跡に隣接する。住居周辺に土坑を配置する例は真木沢遺跡に認められ、竪穴住居跡周辺に古代の土坑9基が確認されており、そのうち4基が断面フラスコ形を呈する。土坑内から植物遺存体は検出されていないが、これらは貯蔵穴ではないかとの指摘がなされており、住居外に貯蔵施設を設ける例として注目される。

(3) 焼 土 遺 構

3基を検出し、すべて縄文時代早期～前期前半と考えられる。Ⅲ群土器を主体とする遺物集中部1・2の中間に検出した。

(4) 遺 物 集 中 部

旧石器時代研究の石器集中部や疊群の認定基準を用いて、一般的な掘り込みのある遺構とは異なる操作概念上の遺構を設定した。結果、VI層に垂直分布ピークをもつ7ヶ所の遺物集中部を設定した。集中部の形成要因は道具の製作や居住活動の結果としての遺棄・廃棄痕跡のほか、自然の蓄力によって窪地に二次的に堆積した結果などが考えられ、短期間で形成されたものもあれば、長期にわたるものもある。今回設定した7ヶ所の遺物集中部は遺物集中部1を除けば、土器の年代から比較的短期間での形成が考えられる。また、本遺跡の遺物集中部は緩斜面上に位置し、遺物の移動・拡散は急斜面上などに比して少ないであろう。

遺物集中部出土の石器は小形石器が主体を占め、長期の居住活動の痕跡となる人形石器が見られない。したがって本遺跡は縄文時代早期～前期にかけてキャンプサイト的な場として利用されたと考えられる。遺物集中2と3、4と6は土器の接合関係が認められる。遺物集中2が土器主体なのに対し遺物集中3は石器主体で尖頭器製作が行われており、場の機能差が想定されるだろう。

2 遺 物

遺物は小コンテナ(30×40×10cm)5箱、疊は中コンテナ(30×40×15cm)3箱分出土した。内訳は縄文土器・土師器が小コンテナ4箱(344点)、石器が小コンテナ1箱(77点)、疊が中コンテナ3箱分(89点)である。その他、竪穴住居跡から炭化種実、骨片、水晶製碎片が出上している。2・3号竪穴住居跡出土炭化物は放射性炭素年代測定を実施し(V章2節参照)、2号竪穴住居跡のカマド内土壤から検出した炭化種実については種実同定を行っている(V章1節参照)。

縄文土器は早期前葉～前期前半・晩期の資料で構成される。早期前葉～前期前半の土器はVI層に

ピークを持つ。調査区東側ではⅡ a 群土器（早期後半）の出土数が多く、西側ではⅢ群土器（前期前半）がまとまっている。Ⅳ群土器（晩期）は表上直下またはⅢ層内から出土しており、粗製土器が主体である。I群（早期前葉）は日計式押型文と考えられ、最近では久慈市中田遺跡で報告例がある。なお、縄文土器No52はI群土器に伴う可能性を指摘している。Ⅱ a 群は八戸市赤御堂遺跡を標式とする赤御堂式相当である。赤御堂式は纖維を含まない尖底土器で土器の外側面に縄文を施すことを特徴とするが、纖維を若干含むものを赤御堂式新段階に位置づけられており（八戸市教委1981）、本遺跡のⅡ a 群も纖維を若干含むことからこの段階の所産と考えられる。Ⅱ a 群はこれまで村内での報告例はないが、岩手県沿岸地域では宮古市千鶴遺跡・小堀内Ⅰ遺跡・大槌町崎山弁天遺跡・大船渡市閑谷洞穴に類似がある。内陸地域では二戸市飛鳥台地遺跡・零石町仏沢Ⅲ遺跡・住田町蛇王洞遺跡などで報告例がある。Ⅱ a 群の縄文施文の主体は0段多条LRで、本遺跡でもその傾向は変わらないが附加条を用いる点で異なる。附加条は後出の土器群に特徴的な施文方法であるが、今回の調査成果として早期後半でも使用が確認されたことになる。早稻田5類相当としたⅡ b 群は県内での報告が少ない。Ⅲ群は前期前半を一括したが、尖底土器を主体とする早稻田6類相当を主体とする。纖維が多量に含まれ、口縁に結節回転文や押引沈線文の施文を特徴とする。県内では二戸市飛鳥台地Ⅰ遺跡・馬立Ⅰ遺跡に良好な資料があるものの、早稻田6類報告例は少ない。

石器は大半がⅥ層で出土し、早期～前期に位置づけられる。尖頭器4点、石鎌5点、石匙2点、搔器2点、削器2点、楔形石器1点、石核2点、剥片37点、碎片9点、特殊磨石4点、磨石8点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、裸石器には砂岩、安山岩、閃綠岩が利用されている。遺物集中部3は石器製作跡で、黒色頁岩1を母岩とする小形の尖頭器、剥片、碎片が出土している。石器組成上では小形石器を主体とし、居住活動の安定性を示す重量のある石皿などの石器が見られないことから、本遺跡での活動が一時的な滞在に限られる可能性があるだろう。

七輪器は竪穴住居跡から出土し、2号竪穴住居跡では壺5個体、3号竪穴住居跡では壺4個体が出土している。村内での出土例は子木地の台遺跡と真木沢遺跡で破片資料の報告例があるものの村内での古代土器の様相は判然としない。本遺跡でも大まかに2号竪穴住居跡出土資料が奈良期、3号竪穴住居跡出土資料が平安期に所属する可能性を指摘するにとどめる。

引用・参考文献

- 田野畠村教育委員会 1985『田野畠村史』
- 田野畠村教育委員会 1994『子木地の台遺跡』第2集
- 田野畠村教育委員会 1998『真木沢Ⅰ遺跡・切牛Ⅱ遺跡』第3集
- 田野畠村教育委員会 2001『田野畠村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』第6集
- 田野畠村教育委員会 2002『田野畠村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』第8集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第120集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第276集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第452集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』第466集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『中田遺跡発掘調査報告書』第478集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『沼袋遺跡発掘調査報告書』第483集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『平成17年度発掘調査報告書』第490集
- 八戸市教育委員会 1981『長七谷遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡』第8集
- 縄文文化検討会 1989『東北・北海道における縄文早期中葉から前期初頭にかけての十器編年について』

写 真 図 版

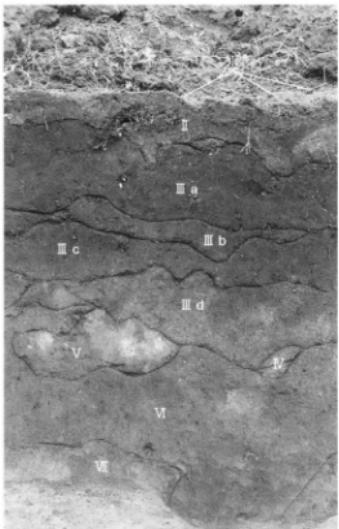


千足南遺跡遠景



千足南遺跡調查区

写真図版 1 千足南遺跡



基本土層



調査区南側完掘



調査区西側完掘



1号整穴住居跡完掘



1号整穴住居跡カマド実掘



1号整穴住居跡カマド断面（C-C'）

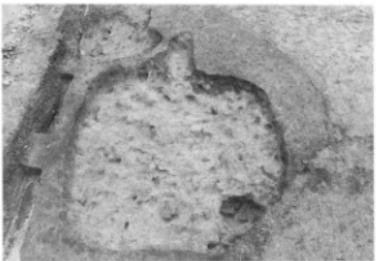


1号整穴住居跡カマド断面（D-D'）

写真図版2 基本土層、調査区完掘、1号整穴住居跡



2号整穴住居跡完掘



2号整穴住居跡掘り方



2号整穴住居跡断面 (A-A')



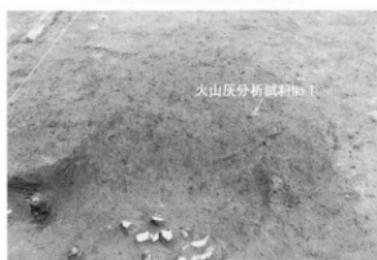
2号整穴住居跡断面 (B-B')



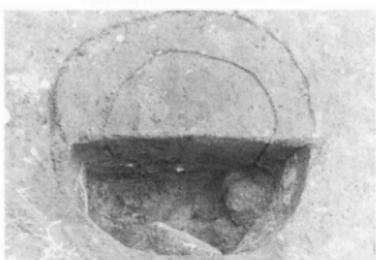
2号整穴住居跡貼床部断面 (A-A')



2号整穴住居跡貼床部断面 (B-B')



2号整穴住居跡北東部検出

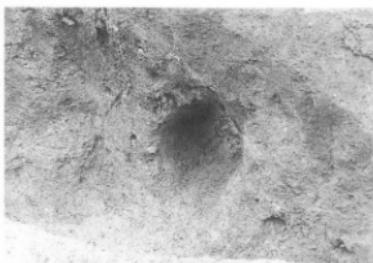


2号整穴住居跡柱穴 1断面

写真図版 3 2号整穴住居跡①



2号竪穴住居跡カマド窯盤



2号竪穴住居跡カマド 2 煙道部断面



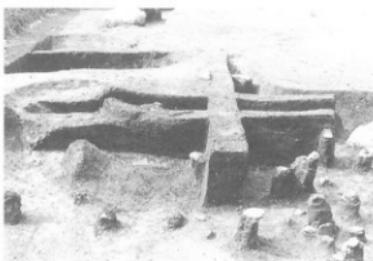
2号竪穴住居跡カマド断面 (G-G') ①



2号竪穴住居跡カマド断面 (G-G') ②



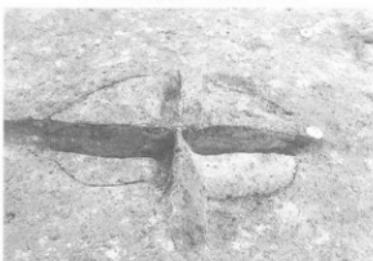
2号竪穴住居跡カマド断面 (D-D')



2号竪穴住居跡カマド断面 (E-E')



2号竪穴住居跡カマド焼土範囲断面



2号竪穴住居跡焼土 2断面



3号整穴住居跡完掘



3号整穴住居跡掘り方



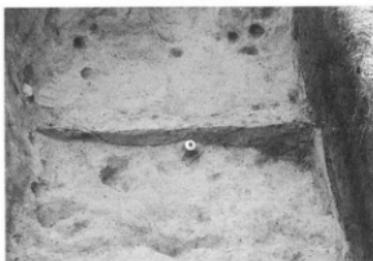
3号整穴住居跡断面（A-A'）



3号整穴住居跡断面（B-B'）



3号整穴住居跡贴床部断面（A-A'）



3号整穴住居跡贴床部断面（B-B'）

写真図版 5 3号整穴住居跡①



3号竪穴住居跡カマド完掘



3号竪穴住居跡カマド断面（D-D'）



3号竪穴住居跡カマド断面（C-C'）



3号竪穴住居跡カマド焼土範囲断面（E-E'）



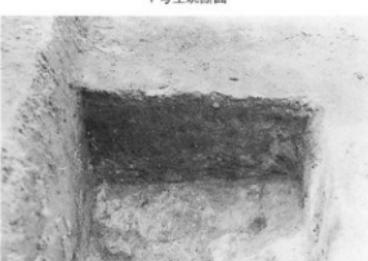
1号土坑完掘



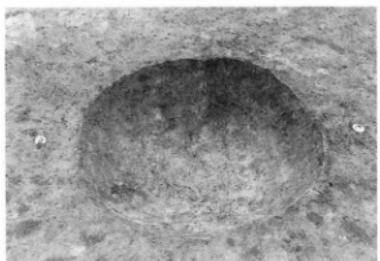
1号土坑断面



2号土坑完掘



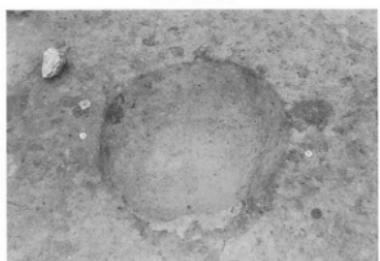
2号土坑断面



3号土坑完掘



3号土坑断面



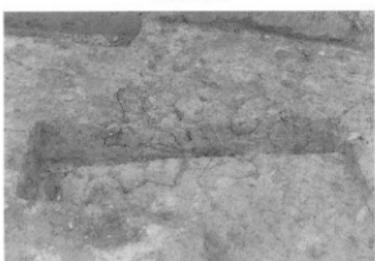
4号土坑完掘



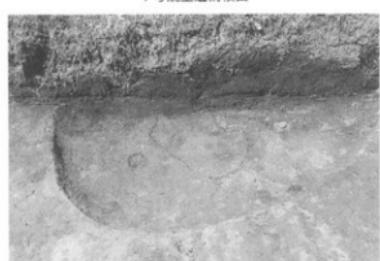
4号土坑断面



1号烧土造模挖出



1号烧土造模断面



2号烧土造模挖出



2号烧土造模断面

写真图版 7 3·4号土坑、1·2号烧土造模



3号焼土遺構検出



3号焼土遺構断面



MDグリッド調査区壁



MDグリッド調査区壁



No.22尖頭器出土状況



VD・MDグリッド実掘

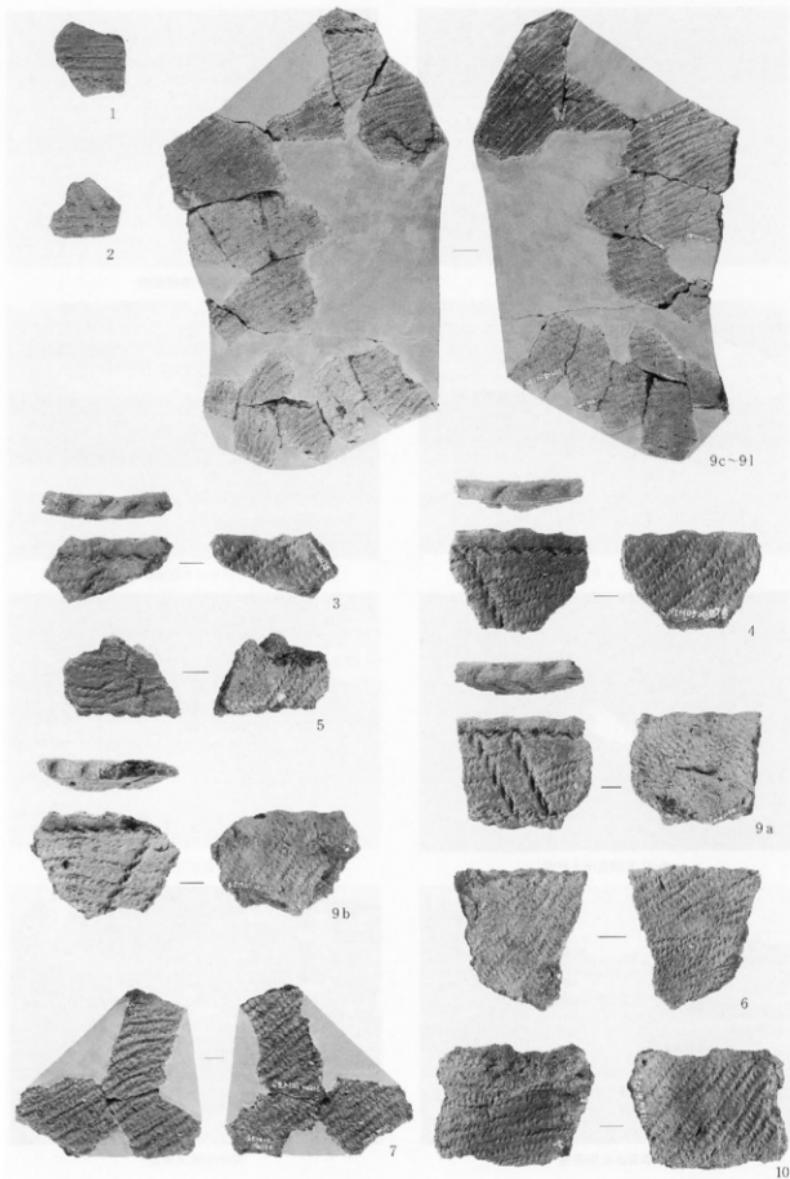


調査区北側完掘

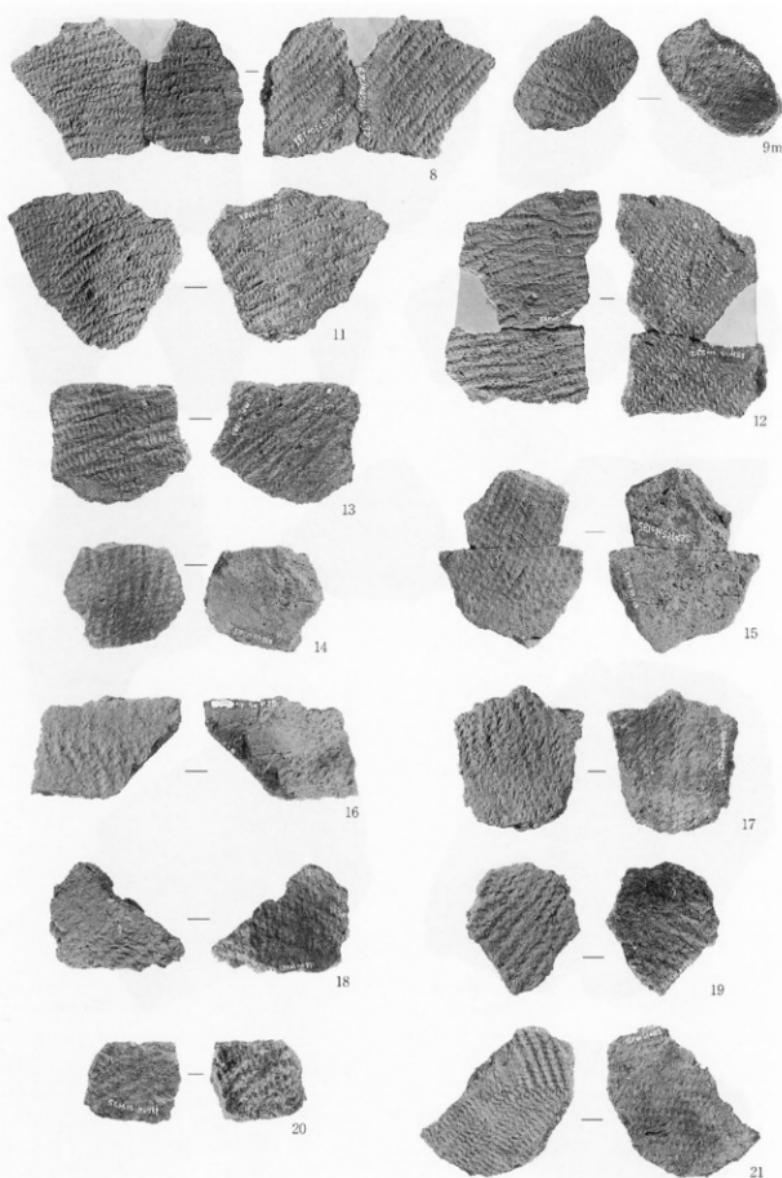


現地説明会風景

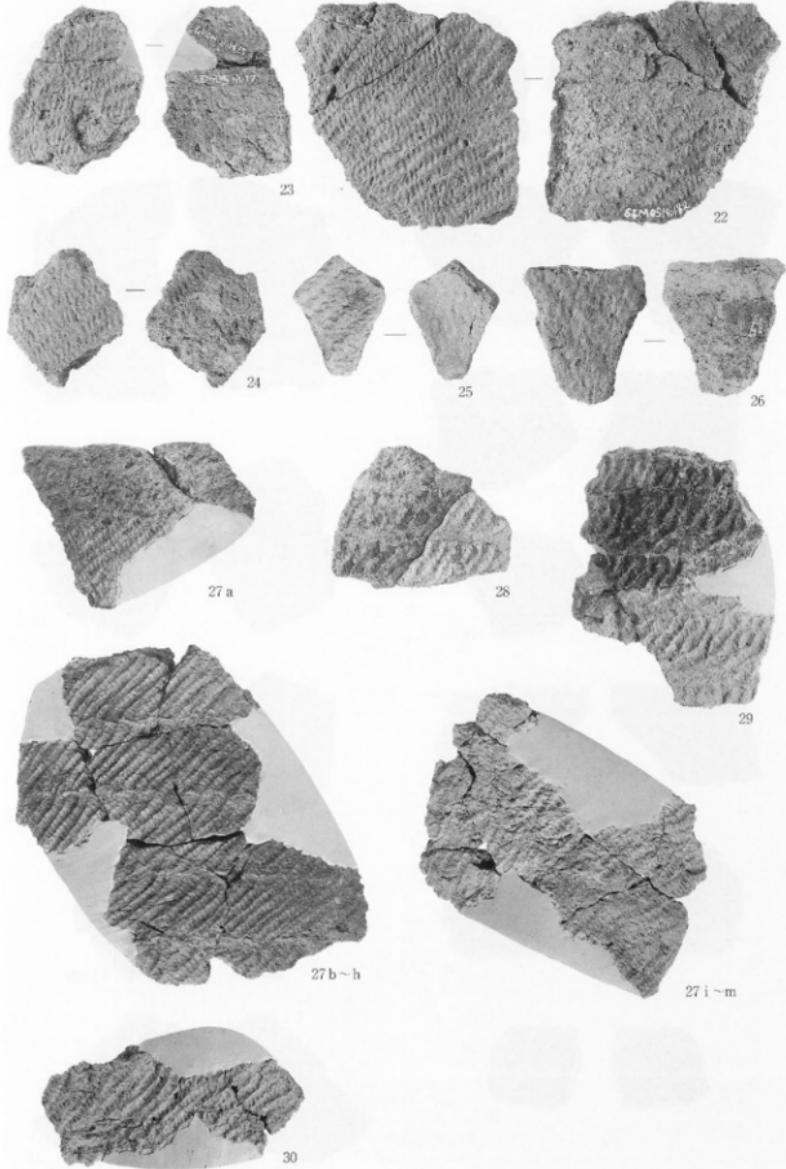
写真図版 8 3号焼土遺構、調査区完掘、現地説明会



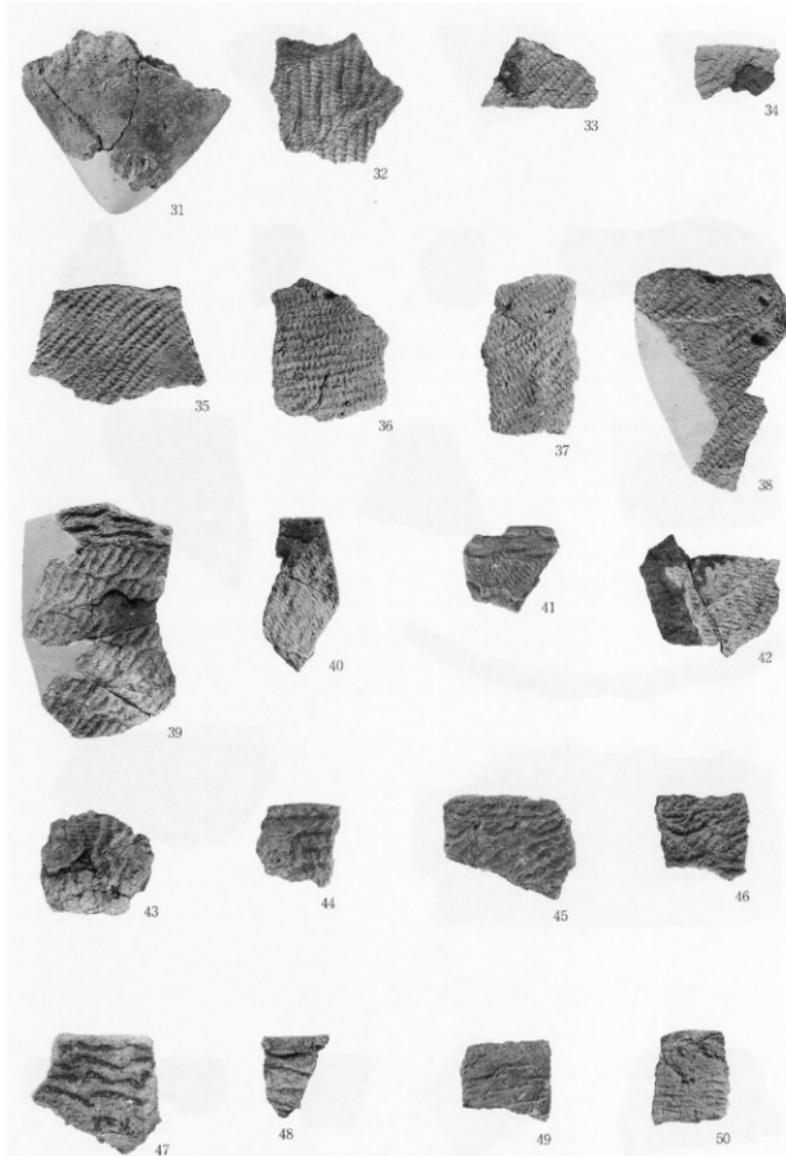
写真図版9 縄文土器①



写真図版10 繩文土器②



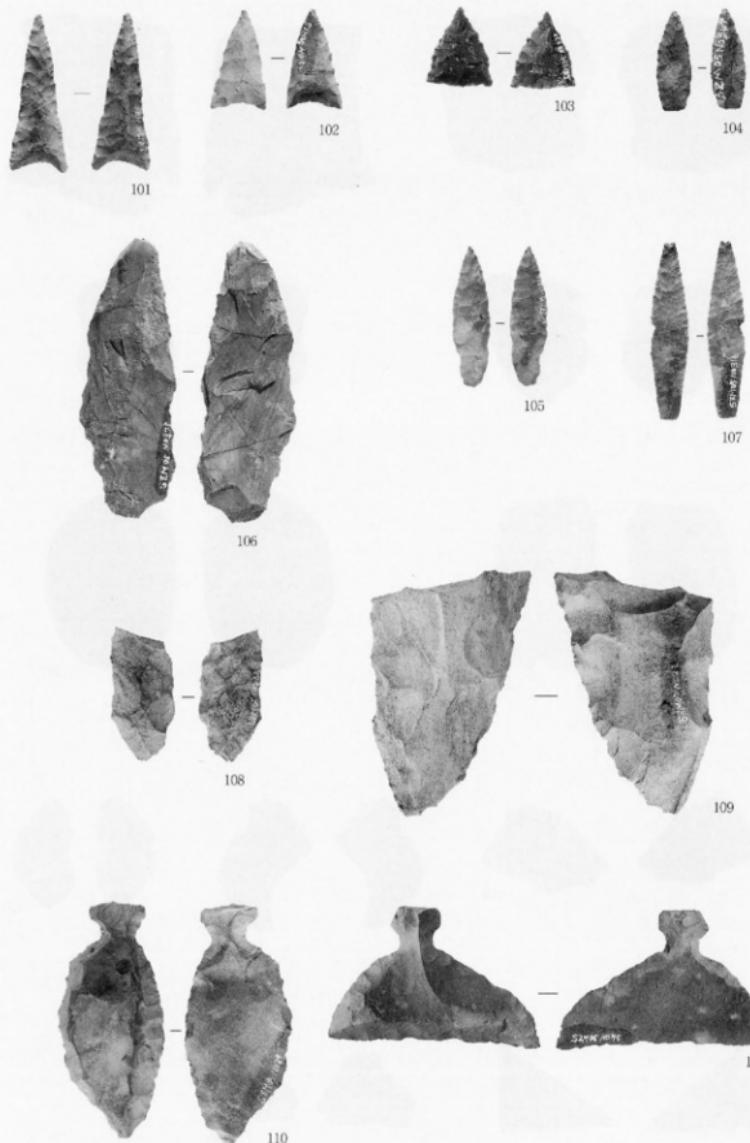
写真図版11 繩文土器③



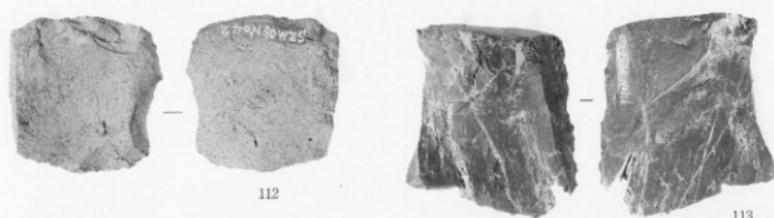
写真図版12 織文土器(4)



写真図版13 純文土器⑤



写真図版14 石器①



112

113



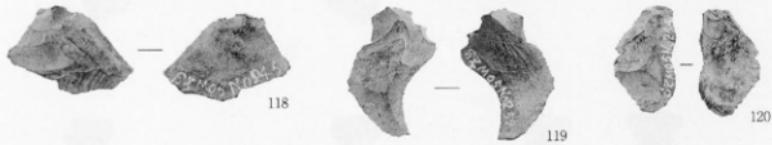
114

115



116

117



118

119

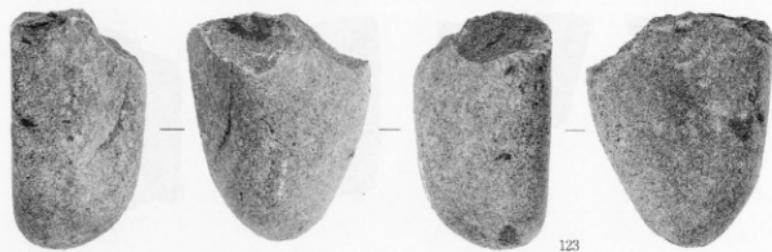
120



121

122

写真図版15 石器②



123



124

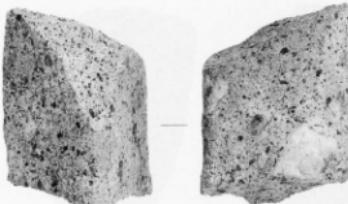


125

写真図版16 石器③



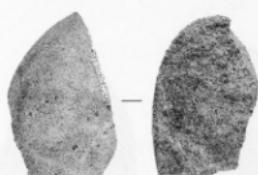
126



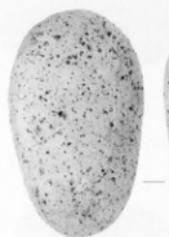
127



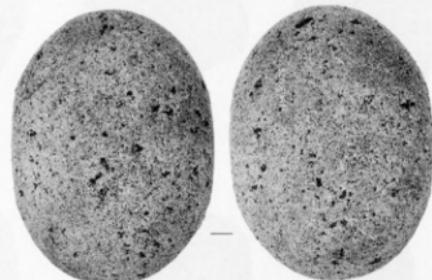
128



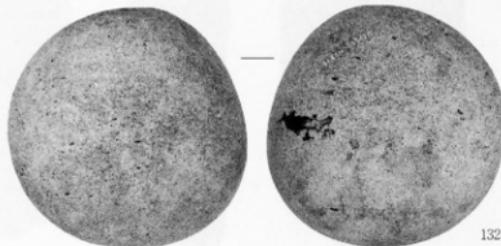
129



130

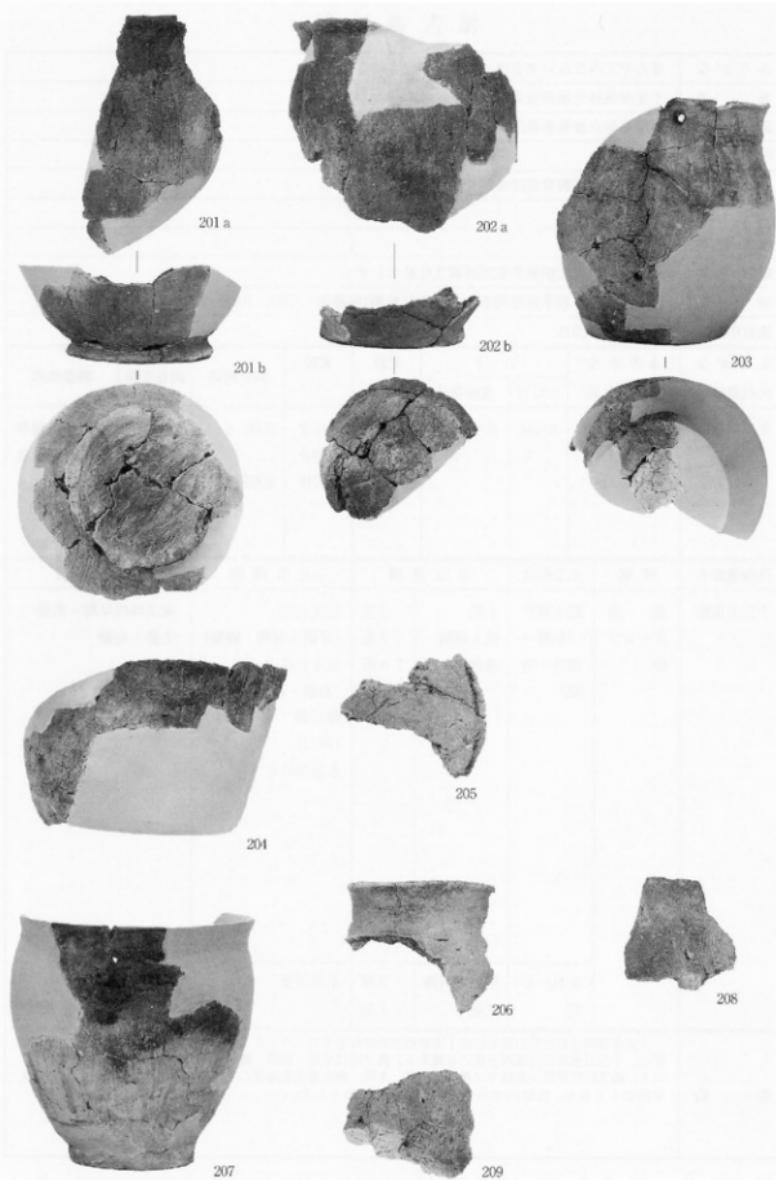


131



132

写真図版17 石器④



写真図版18 土師器

報告書抄録

ふりがな	せんぞくみみないせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	千足南遺跡発掘調査報告書							
副書名	農用地総合整備事業関連調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第496集							
編著者名	米田 寛							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2007年2月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。	。	。	。	
千足南遺跡	岩手県下閉伊郡山野畠村字千足59-16	03484	KG11-1013	39度57分39秒	141度49分02秒	2005.6.1～2005.7.29	農用地整備事業に伴う緊急発掘調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
千足南遺跡	集落 キャンプ跡	縄文時代 (早期～前期・晚期)	土坑	3基	縄文土器 (早期～前期・晚期)	縄文時代早期～前期の上器・石器		
			焼上遺構 遺物集中部	3基 7ヶ所	剥片石器 (右端・石匙ほか) 櫛石器 (磨石) 水晶製碎片			
		奈良～平安	堅穴住居跡	3棟	土師器甕			
			土坑	1基				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集

千足南遺跡発掘調査報告書

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成19年2月23日

発 行 平成19年2月23日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印 刷 株式会社長内印刷
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ一丁目3-28
電話 (019) 643-5343

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007

